

トランスサイエンス

～フクシマ・オキナワを通して近代化・科学技術を考える～

川北 慧

〈キーワード〉 科学技術総力戦体制、構造的差別、原発、米軍基地、軍官民共生共死

はじめに

本論文は、2019年度教養総合I「トランスサイエンス～フクシマ・オキナワを通して近代化・科学技術を考える～」の授業実践ならびに実地調査の記録である。トランスサイエンスとは、アメリカの物理学者ワインバーグが1970年代に提唱した「科学に問い合わせることはできるが、科学では答えることのできない問題」(Questions which can be asked of science and yet which cannot be answered by science)である。科学技術の進歩によって、私たちは確かに「豊かな」生活を享受することができるようになったが、これらは同時に環境汚染や自然破壊、科学兵器や核兵器の開発や原発事故などをもたらし、人類を脅威にさらしてきた。これらをふまえ、本授業ではどのように科学が社会化・制度化され¹、それによってどのように「光と影」が生み出されているのか、明らかにすることを目的とした。

そのための方法として、近年注目されているのが科学技術社会論(STS: Science, Technology and Society)によるアプローチである。これは、科学技術と社会の関わりについて、社会学、政治学、経済学、歴史学、倫理学、哲学、教育学など人文科学や社会科学の観点から学際的に研究するものであり、社会の側から科学を問い合わせるアプローチである。STSに関して、小林(2007)は従来の科学技術コミュニケーションが「科学者が市民に対して知識を「啓蒙」する欠如型コミュニケーションであった」と指摘したうえで「科学が判断し、答えを出すことができる領域」と「科学を超越している領域」の線引き自体が、専門家によってではなく、公共空間における社会的討議によって行わなければないと指摘している。さらに、その際重要なのは、安全性についてのリスク・コミュニケーションではなく、その技術が社会・人々の生き方に与える影響であると小林は指摘している。こうしたことふまえ、本授業では、生徒が主体となり、社会的討議を行うことによって、科学が人々の生き方に与える影響について考察することを目標とし、アクティブラーニング型の授業を展開した。

¹ 例えば古川(2018)は、国や時代など異なった文脈によって「科学の社会化」が行われていることを指摘しつつ、「信仰のための科学」「教養・人間形成のための科学」「学問それ自体の科学」「技術のための科学」「文化運動としての科学」「社会変革のための科学」「体制維持のための科学」「産業のための科学」「国家のための科学」といった様々な理念やイデオロギーが拮抗し、競合し、浮沈し、融合することにより、科学の制度化が行われたとし、その過程について詳細に分析している。

第1章 授業の概要

教養総合Ⅰの授業は2単位である。次頁に実際に生徒に配布した年間授業計画を掲載してあるが(資料1), フクシマで行う実地調査まで28時間, オキナワで行う実地調査まで10時間, 実地調査後10時間の計48時間が年間授業時間である。

フクシマでの実地調査までに必要なのは、日本において「科学技術の社会化」がどのように行われていったかに関する基礎知識の習得と、放射線や原子力発電に関する基礎知識の習得である。日本における「科学技術の社会化」に関しては、山本義隆『近代日本150年：科学技術総力戦体制の破綻』の輪読を行うことにした。山本は、東大物理学科時代から物理学者としての将来を嘱望される秀才であったが、東大全共闘議長をつとめたのちに大学を去り、駿台予備校の予備校講師をつとめながら、在野の研究者として研究をつとめている異色の人物である。特に原子力発電のあり方については、東日本大震災前から警鐘を鳴らし続け、震災の5ヶ月後に出版された『福島の原発事故をめぐって』においては、社会が原子力発電というしくみを作り上げてきた過程について、次のように辛辣な批判を行っている。

税金をもちいた多額の交付金によって地方議会を切り崩し、地方自治体を財政的に原発に反対できない状態に追いやられ、優遇されている電力会社は、他の企業では考えられないような潤沢な宣伝費用を投入することで大マスコミを抱き込み、頻繁に生じている小規模な事故や不具合の発覚を隠蔽して安全宣言を繰りかえし、寄付講座という形でのボス教授の支配の続く大学研究室をまるごと買収し、こうして地元やマスコミや学界から批判者を排除し翼賛体制を作りあげていったやり方は、原発ファシズムともいべき様相を呈している。

生徒たちがフクシマ・オキナワで向き合わなければならぬことは、官（中央官庁）・産（産業界）・学（大学）と軍（軍隊）が協働することによって、科学が社会化・制度化されていった結果、そのもとで暮らしていた人々が国策の犠牲となった、現在進行形で犠牲となることを強いられているという現実である。黒船の来航からフクシマの原発事故までを振り返りつつ、なぜ科学技術の進歩は、無条件に礼賛されてきたかを考えるために、毎回の授業は筆者が進めるのではなく、あらかじめ指名された生徒がレジュメを切り、問題提起をしたうえで、コメントーターがコメントを行い、班ごとにディスカッションを行うという生徒主体の形式で行うこととし、筆者はファシリテーターに徹することとした（写真1・2）。

◎ 1 学期 授業計画

4/19 自己紹介、授業計画、コンビンシートについて、輪講・発表の仕方・研究旅行について、序文

4/26 「チエルノブリの真相」(米国 BBC 2006 年放送)視聴

5/10 近代日本一五〇年 科学技術統力体制の確立（1）

1、欧米との出会い

①蘭学から洋学へ ②エヘルギー革命との遭遇 ③明治初期の文明開化 ④シンボルとしての文明

担当：高梨 コメンテーター：久野

⑤廢理学ブーム ⑥科学技術をめぐつて ⑦実業のすすめ ⑧過大な科学技術幻想

担当：師岡 コメンテーター：水野

2、資本主義への歩み

①工部省の時代 ②技術エリートの誕生 ③帝国大学の時代 ④鉄道と通信網の建設

担当：黒岩 コメンテーター：宮川

資料まとめ 年間授業計画（1 学期）

6、そして戦後社会

①総力戦の遺産 ②科学者の戦争経験 ③復興と高度成長 ④軍需産業の復興

担当：金鳥 コメンテーター：黒岩

⑤高度成長と公害 ⑥大学研究者の責任 ⑦成長幻想の終焉

担当：菅原 コメンテーター：九星

①原子力開発をめぐつて ⑦原子力開発の意味 ③日本の原子力開発 ④そして破綻をむかえる
①原子力物理学者 ②原子力開発の政治的意味 ③日本の原子力開発 ④そして破綻をむかえる
担当：森 コメンテーター：小島

6/21 映画『フラガール』（シネカノン）視聴

6/14 近代日本一五〇年 科学技術統力体制の確立（5）

担当：高梨

⑥電力使用の普及 ⑦女工袁史の時代 ⑧足尾銅山鉛毒事件

担当：土屋

コメンテーター：土屋

5/17 近代日本一五〇年 科学技術統力体制の確立（2）

⑤製糸業と紡績業

⑥電力使用の普及

⑦女工袁史の時代

⑧足尾銅山鉛毒事件

担当：九鬼

コメンテーター：土屋

◎ 2 学期 授業計画

9/6 夏休みの宿題発表（1）

①福沢の脱亜入欧

②そして帝国主義へ ③エセルギー革命の完成

担当：小島

コメンテーター：細田

④地球物理学の誕生

⑤田中館愛橋をめぐつて ⑥戦争と応用物理学

担当：富久尾

コメンテーター：勝又

6/28 期末試験（事前試験）

9/27 放射線に関する基礎講義

10/4 NHKスペシャル『原発メルトダウン』危機の8時間』視聴

④、総力戦体制に向けて

①第一次世界大戦の衝撃

②近代化学工業の誕生

③総力戦体制をめざして

担当：春山

コメンテーター：森

④植民地における実験

⑤テクノクラートの登場

⑥総力戦体制への道

担当：村山

コメンテーター：菅原

5、戰時下の科学技術

①科学者からの提言

②戰時下の科学活動員

③科学者の反応

④統制と近代化

担当：兒島

コメンテーター：高梨

10/11 映画『ドキュメント沖縄戦』（沖縄戦記録フィルム1 ファイアート運動の全）視聴

10/22-24 美地調査（福島県）行程予定

1日目：上野原集会→特急にていわき市石炭化石館ほるる見学、常磐焼飯販売フィールド学園、

スパリートハイアンドスクール学習（福島第一原発内見学、東京電力鹿角資料館、宮城町夜の森地区（帰還困難区域）見学、宮間復

興メガソーラーSAKURA見学、いこいの村なみえ（気仙住宅）泊

2日目：福島第二原発内見学、大平山里園、浪江駅前、浪江町物語つえ隊、岡洋子氏講話、

飯塚村にて原子力規制委員会元委員長 田中俊一氏講話、福島高校（SSH 指定校）にて生徒交流

福島駅→新幹線にて東京駅へ（大宮駅途中下車可）

6/7 近代日本一五〇年 科学技術統力体制の確立（4）

⑤経済新体制と経済学者

⑥科学技術新体制

⑦総力戦と社会の合理化

⑧科学技術の陰で

担当：徳田

コメンテーター：鈴岡

11/1 日本にとって沖縄とは何か オリエンテーション

11/8 日本にとって沖縄とは何か（1）

1、平和国家日本と軍事要塞沖縄

①三位一体の占領政策 一象徴天皇制・非武装國家日本・沖縄の米軍支配

担当：勝又 コメンテーター：富久尾

②サンフランシスコ体制の成立 ー「目下の同盟国」日本と「太平洋の要石」沖縄

担当：細田 コメンテーター：春山

③「島ぐるみ闘争」の時代 ーそれは砂川闘争の時代でもあった

担当：土屋 コメンテーター：村山

2、60年安保から沖縄返還へ

①60年安保改定と沖縄 一構造的沖縄差別の定着

担当：宮川 コメンテーター：見島

③沖縄返還とは何であったか

担当：久野 コメンテーター：金島

3、1995年の民衆蜂起

①沖縄返還後の変化と住民

担当：黒岩 コメンテーター：師岡

②1995年の民衆蜂起

担当：九鬼 コメンテーター：高梨

11/22 日本にとって沖縄とは何か（3）

③普天間、そして辺野古をめぐる動向

担当：小島 コメンテーター：菅原

4、「オール沖縄」の形成

①教科書問題の意味するもの

担当：富久尾 コメンテーター：森

②政権交代・オスプレイ配備・里立承認

担当：春山 コメンテーター：勝又

③尖閣問題への視点 ー先島諸島の状況

担当：村山 コメンテーター：細田

11/29 日本にとって沖縄とは何か（5）

5、沖縄、そして日本は何処へ

①2014年の高揚

担当：見島 コメンテーター：土屋
②翁長県政と安倍政権の対峙

担当：徳田 コメンテーター：宮川

③日本にとって沖縄とは

担当：金島 コメンテーター：水野

12/21-25 實地調査（沖縄県） 行程予定

1日目：羽田空港集合→飛行機にて那覇空港へ、奥武山公園にてアシリテーターの大学生ヒアイヌブレ

イク、アブチラガマ見学、ひめり平和祈念資料館見学、荒崎海岸にてワークショップ
ホテルにて泊りかえり、那覇市内泊

2日目：沖縄県立平和祈念資料館見学＆ワークショップ、嘉数高台より普天間基地見学、上大断名公民館

にてワークショップ、ホテルにて泊りかえり、那覇市内泊

3日目：辺野古にてフィールドワーク（辺野・反対それぞれの立場の住民との対話）、シーカヤック、ジユ

ゴンの見える丘にて名護市議員真鍋琢磨氏より講話、ホテルにて泊りかえり、本郷町泊

4日目：沖縄海洋公園フィールドワーク、本郷町フェリーで伊江島へ、伊江村にて民泊

己氏の講話、各家屋にて家業体験、各家屋にて民泊

5日目：各家屋にて家業体験、伊江島→フェリーで本部港へ、那覇新都心（シュガーロードヒル）フィールドワーク、各自で國際通り散策、那覇空港→飛行機にて羽田空港へ

◎ 3学期 授業計画

1/10 レポート・研究発表スター作成（1）

1/17 レポート・研究発表スター作成（2）

1/24 レポート・研究発表スター作成（3）

2/7 プレ発表会（1）

2/14 プレ発表会（2）

2/19 SSH・教養総合研究大会

輪読に加えて、授業では『切尔ノブイリの真相：ある科学者の告白』（原題：Chernobyl Nuclear Disaster 制作：BBC/Discovery Channel/ProSieben 2006 年）と『原発メルトダウン：危機の 88 時間』（制作：NHK 2016 年）の鑑賞を行った。『切尔ノブイリの真相』は、切尔ノブイリ原発後に旧ソ連事故調査委員会の主要メンバーとして、事故後現地入りしたワレリー・レガソフの回顧録をもとにつくられたドキュメンタリーである。切尔ノブイリ原子力発電所における事故は、外部からの電力供給がストップした際にいかに原子炉を安定して運転させるかを確かめる「安全試験」の最中に起こっている。ドキュメンタリーでは、運転員が異常に気づいていたものの、実験を中止してしまうと幹部の昇進に関わるため実験が続行されたこと、その結果事故が起きたが、幹部は事故の情報を内部に秘匿することに執着したこと、事故の内容を世界に公表すべきと考えるレガソフに対し、政府がストップをかけたことなどが次々に語られる。生徒のコメント²には「切尔ノブイリの名前は聞いたことがあったが、こんなに恐ろしい事故であったことをはじめて知った。フクシマの事故はこれらの反省がなされていないのではないか」といったものや「国家によって事故が起こってしまったが、それを一般の市民に知らせずに、国は最終的に何をしたかったのか。全く分からぬ」というように科学技術政策を推し進める国家のあり方を問うものが多数あった。

また『原発メルトダウン』は、福島第一原発に津波が襲来してから水素爆発、メルトダウンにいたるまでの経緯を吉田所長や東電関係者の視点から描いたドキュメンタリーである。中央制御室と免振重要棟、東京本店と首相官邸のやり取りや証言をもとに、現場で働いていた人たちの苦悩を知ることができる。実地調査に行く高校 2 年生が 3. 11 を体験したのは 8 年前の小学校 2 年生の時であり、津波の映像を見た記憶はあるが、そもそも原発事故とはどのようなものだったのか、その頃の社会はどのような雰囲気であったのか、記憶にない生徒も多い。生徒のコメントには「とても言葉では言い表せないようなことが起こっていたことを初めて知った。知らなかった自分が腹立たしかった」というものや「ドライウェルベントの指示で「こっちで責任はとるからさ、早くやれよ。吉田」という台詞があったが、二度の水素爆発によって多くの作業員を負傷させてしまい、現場が追い詰められている中で、東電が政府の機嫌を伺っているような印象を受けた。東電本店の「責任を負う」とはどこまで責任を負うことを考えていたのだろうか」「結局原発事故の責任は誰にあるのか分からなくなつた」というように「責任」の所在はどこにあるのかというものが見られた。

さらに放射線・原子力発電に関する基礎知識を習得するために、本校物理科の森脇啓介教諭の手助けを受けながら、放射能と放射線、放射性物質の違いや、Bq から Sv の換算演習を行い、風評被害がどのように創られるか学んだ。また霧箱を作成し、自然放射線が私たちの

² 本論文で用いる生徒のコメントは、生徒が授業中に行った発言のメモや生徒が授業後、もしくは実地調査の毎日行われたディスカッション後にスプレッドシートに書きこんだふりかえりをもとにしている。

まわりを飛び交っている様子を観察した（写真3）。

このように生徒自身は、放射線に関する基礎知識を体得することができるが、保護者にとって帰還困難区域や原発構内へ立ち入ることは大きな不安を生むこととなる。こうしたことから、生徒・保護者を対象とした事前説明会を行った。説明会には、福島県庁より実地調査に同行いただく佐藤良作さん、東京電力福島復興本社より坂本裕之さんに来校いただいた（写真4）。佐藤さんからは、福島県をとりまく現状や住民の避難状況、震災関連死や風評被害についてお話しeidaitai。また坂本さんからは、見学予定の福島第二原子力発電所の現況や廃炉決定を受けて、これから東電としてどのように地域と関わっていくつもりかという説明を受けた。生徒からは「現在中間貯蔵施設に保管されている除染で取り除いた土や放射性物質がついた廃棄物を福島県外に保管するということになっているが、事実上不可能ではないか」といった質問（これに対しては「大変ご迷惑をおかけしているが東電が決めることがないため、お答えできる立場ではない。関係各所と連絡を取り合いながら、地域住民にご理解いただける方法で進めていきたい」という回答が行われた）や「第二原発の廃炉が決定したが、実際のところ地域住民はどのように考えているのか」という質問（これに対しては「廃炉までは長い時間がかかり、それまでに地域住民の雇用を生むという考え方もある。原発事故後に入社する社員の中には、廃炉をやり遂げるという思いで入社してきた人もおり、これからも地域のみなさまと関わりながら、作業を進めていきたい」という回答がなされた）など、実地調査前から討議を求める生徒たちとリスク・コミュニケーションで場を乗り切ろうとする東電の姿勢がぶつかり合う場となった。

また、福島県の浜通りは明治時代より石炭を産出し、首都圏に供給してきたが、エネルギー革命によって産業を炭鉱から観光・原子力産業へ作り替えていったという歴史がある。こうしたことをふまえ、炭鉱の歴史と観光産業というものがどのように創られていったのかという観点を事前に学ぶために『フラガール』（制作：シネカノン、2006年放映）を鑑賞した。「科学技術産業に代わる観光産業を創る」という視点は、その後12月に行われた沖縄実地調査につなげることができるものだったということができよう。

フクシマの実地調査から帰ってきたのち、オキナワの実地調査までは、授業時間が10時間しかない。そのため、その後の授業は「軍官民の共生がどのように創られていったのか」「戦後沖縄に押し付けられた日本の安全保障を私たちはどのように考えればよいのだろうか」という二点に論点を絞り、新崎盛暉『日本にとって沖縄とは何か』の輪読を行った。新崎は、沖縄近現代史の第一人者で、この本は2018年に亡くなる直前に書かれたものである。1945年から現在にいたる沖縄の歴史をたどりながら、沖縄が受けた構造的差別がどのように創られてきたか、輪読を通してその本質に迫りたいと考え、この本を選んだ。

とはいえる、沖縄における構造的差別を理解するためには、薩摩侵攻から琉球処分、さらに

沖縄戦にいたるまでの歴史を知る必要がある。2018年度の本授業開講時には、新城俊昭『琉球・沖縄史』を輪読したが、今回は筆者がダイジェストで紹介するにとどまった。しかしながら、沖縄戦に関しては、実際の映像を見せたほうが効果的であると考え、『1 フィート映像でつづるドキュメント沖縄戦』（制作：1 フィート運動の会、1995年制作）を鑑賞した。これはアメリカ国立公文書館に収められていた膨大なフィルムをまとめたもので、アメリカ軍が撮影した「集団自決が行われる様子」「摩文仁の断崖に追い詰められ自決する住民」「日本の降伏が決まり「喜びのポーズ」を強要される住民の姿」「山に逃げ込んだ住民を捜索にいく朝鮮人捕虜」「沖縄に設けられた慰安所」といった映像で成り立っており、軍隊と住民の関係を理解することができる。生徒からは「すごくしんどかった。(中略)これまで戦争の話は授業で何度も受けてきたが、死体の映像を実際に見たのははじめてだった。福島と同じくこれから授業もすごくしんどくなると思うが、事実として受け止めなければいけないのだと思った」というように、福島実地調査直後だったこともあり、事実から目を背けてはいけないという感想が大半だった。

さて、いささか長い授業概要の紹介となったが、次章以降は、実際に輪読した文献内容を紹介しながら、フクシマ・オキナワの実地調査に向けて、どのような議論が授業において行われたか、より詳しく紹介する。

第2章 フクシマ実地調査に向けて

第1節 山本義隆『近代日本150年：科学技術総力戦体制の破綻』の輪読

この章では、山本義隆『近代日本150年～科学技術総力戦体制の破綻～』をまとめながら、輪読を通して生徒からどのような論点や感想が出てきたか順次紹介したうえで「日本における科学の社会史」と私たちがどのように向き合えばよいか、検討する。

第1章「欧米との出会い」で山本は、日本の支配層が科学に注目するようになったきっかけとして、中国がアヘン戦争で英国に敗れたこと、ペリー来航という欧米列強の脅威があったことを指摘している。さらに洋学所の開設や海軍伝習所の創設、オランダ海軍士官を教授とした造船技術や航海術の教育が行われるようになると、私事として行われていた「医師の蘭学」は、幕府による公的教育としての「武士の洋学」に転換していく。山本はこの洋学が「兵学」として軍事技術習得の目的で行われていたと指摘している。さらにペリー2回目の来航時の幕府への献上品が蒸気機関車の模型と有線電信装置一式であったこと、福沢諭吉が幕府使節團として渡米した際「理学のことについては少しも肝を潰すということはなかった」としながらも、蒸気機関が電信に使われていたことに感嘆し、エネルギー革命が起こっていることを知ったこと、万国博覧会の視察を通して科学技術の進歩が国家単位で競われていることをふまえ、これから日本は科学が産業の発展と軍事力の強化にとって不可欠であ

り、国家が科学技術の振興と革新を積極的に支援すべきという思想ができあがっていったことを明らかにしている。これが福沢にとって「文明化」あるいは「文明開化」であったのである。

ところで「科学技術」という言葉は、どのように日本において使われるようになったのだろうか。そもそも西洋において、科学と技術は本質的に異なる営みであった。世界の理解と説明を目的とする科学は、大学アカデミズムの内部で論じられる哲学ないし思想としての自然観であり、実際的応用を意図していたものではない。一方で、製作や操作を目的とする技術は、長年にわたる膨大な経験の蓄積を通して形成されたもので、機械の製作にせよ金属精錬にせよ、力学理論や科学理論に裏づけられていたわけではなかった。そうした背景から、アカデミズムの世界では、職人もその技術も蔑まれていたのである。職人が発明に熱中したのは、学問的関心というよりかは、基本的には職人気質ともいべきものづくりに対する本能的な熱意であったと山本は分析している。ハーバーマスが「学問と技術の相互依存的関係は、19世紀後半まで存在しなかった」「19世紀後半に科学が工業社会の生産力に格下げされていった」と指摘するように、近代に入ると科学は自然に法則を読み込み、現象の行く末を予測する術へと変化し、そのことによって自然への働きかけの指針を与えるものとなっていく。こうした中、日本において欧米伝来の技術は、あまねく「科学技術」として受け取られるようになっていった。

近代以前の西欧世界では、自然是有机的で生命的な全体であり、人間はその一部として自然に調和して生きていると考えられていた。その際、技術は自然の模倣、自然の動きの人為的再現であり、それゆえに自然に劣るものだった。実際の自然是、さまざまな要素が作用しあい、多種の要因が複雑に絡み合ってできているが、こうした中で特定の要素と特定の要因のみを本質的なもの・本来のものとして選定し、他の要素や要員を副次的な夾雜物・非本質的な攪乱要因と人間の主觀で判断する——つまり、人間が本質的と判断した部分のみを取り出し、もともと自然にはなかった理想的状態なるものを人為的に作り出し、そこに「自然の本来の法則」を探るのが近代科学であった。デカルトは、こうした自然を支配し、管理し、人間のために利用する「実践的な哲学」によって「私たちは自然の主人公で所有者のようにになることができる」と豪語している。またベーコンが「知は力なり」と宣言し、科学を技術に接合させることによって、人々の間には「自然を正しく研究すれば、必ず自然是征服される」という確信が生まれていった。こうした近代科学への絶対的な信頼と、欧米の技術があまねく科学にもとづいているという思い込みを背景に、日本は肥大化した科学技術幻想にとらわれるようになっていくのである。

こうした欧米の「科学技術」との出会いに対して、生徒からは「科学技術という言葉自体が創られた概念であることをはじめて知った」「現在の日本において「科学」という思想は

そもそもあるのだろうか」「科学技術が原発を生み出したと考えた場合、どのようにすれば過ちは起きなかったのだろうか」といった科学技術の本質を問うコメントが多くみられた。これを受け、ディスカッションでは「日本において「科学技術」という思想を受け取ることは拒否できなかったのだろうか」という問題提起がなされた。生徒からは「欧米でさえ「科学」と「技術」が接合したことによる問題点に気づけていなかつたため、とにかく欧米列強と対等に渡り合うためには、受け入れるしかなかったのではないか」「日本の職人文化を当時の幕府が評価していなかつたため、思想なきまま「科学技術」という思想を受け入れることになったのではないか」というコメントが出された。

技術者の視点から、思想としての科学にメスを入れるという観点は重要である。そもそも技術者は、毎日の肌感覚をもとに作業を行っている。しかし原発事故に関していえば、技術者からの提言は、政府や大学の研究者（科学者）、産業界といったいわゆる「原子力ムラ」の人々を動かすことはなかった。原発事故後によく使われるようになったリスク・コミュニケーションという考え方は、あくまでこうした機関における「責任」を回避するための「上からの協力関係の構築」であり、その地に住む人々の生き方や幸せを守るという思想から出発したものではない。この章の輪読を通して、日本の科学技術政策の根本が150年前から現在にいたるまで、何ら変わることなく続いているという現状を改めて認識することとなった。

第2章「資本主義への歩み」では、明治新政府が「殖産興業・富国強兵」のスローガンをどのように実現していくか、分析している。そもそも日本の資本主義化は軍と産業の近代化が同時に上から進められたことに特徴づけることができる。工部省によって進められた明治前期の工業化における基本方針は、在来の職人層に依拠し、従来の技術を改良・発展させるものではなく、士族の中から能力のあるものを選抜して技術士官を育成し、欧米の科学技術をひたすら日本に移植するというものであった。また工部大学校や東京大学において教育された舶来の技術は、エリート技術者に優越感情を植えつけ、在来の職人に対する差別意識を形成するものとなっていました。

こうして機械化されていった製糸業や紡績業において、機械を操作する主力は若年女子労働者（女工）だった。しかしながら福沢は、昼夜二交代制で非人道的に女工を働かせることができる労働の実態を「国際競争における日本の利点」として評価している。こうした労働時間の夜間への延長と昼夜二交代制を可能にしたのは電燈の発明による（紡績工場は綿埃が多く、火をつけば大火になる恐れがあり、石油ランプによる夜間照明は危険であった）。また、工場と寄宿舎による不衛生な集団生活は、結核を社会問題化させることとなった。

こうした中、明治におけるもっとも深刻な公害として足尾銅山鉱毒事件が起こる。そもそも足尾銅山の開発は、良質な銅を提供するという勃興期電気工業の要求に応えて行われたものであり、エネルギー革命のために進められた。しかしながら銅の精錬過程の排ガスである

亜硫酸ガスの周辺の山塊への飛散と、精錬用の燃料としての木材の過剰伐採によって、周辺の山林の植生は破壊されていった。さらに硫酸銅から出た酸性の排水や粉鉱の廃棄によって渡良瀬川が汚染され、川魚が大量浮上し、下流の農地は汚染された。また保水力を喪失した渡良瀬川は頻繁に反乱を起こすようになり、下流の農業・漁業を破壊していった。四度にわたる農民の集団上京による請願は警察により弾圧され、鉛毒沈殿と渡良瀬川の洪水調整のためという触れ込みで遊水池となった谷中村は、村民の反対にも関わらず滅亡させられた。こうした「官民挙げての「国益」追求のためには、少数者の犠牲はやむを得ない」という論理は、現在に至るまで幾度も繰り返されている。

生徒からは「科学の発展は弱者の存在によって可能となっているのではないか」「科学技術は本当に幸せをもたらすといえるだろうか、幸せの定義はそもそも何か」「製糸場のようないわばブラック企業ありきの成長は、はたして成長ということができるのだろうか」といったコメントが出された。これをふまえ、「国を発展させるために、弱者の犠牲はやむを得ない」という考え方はなぜなくならないのか」「近代化のために少数の犠牲を生むことは許されるのだろうか」という論点でディスカッションを行った。多くの班が「科学技術の発展なしに今の日本はあり得ない。現在その豊かさを享受している私たちからすると、少数の犠牲は仕方なかったのではないか」という結論を出した。そのため、そもそも「発展」や「豊かさ」とは何か、定義づけを行わせたうえで、改めてディスカッションを行わせた。ディスカッション後の生徒のコメントには「とにかく（筆者注：教養総合の毎回の授業時間である）2時間で結論を出すのには短すぎる」「みんなの発表を聞いたが、（筆者注：少数の犠牲は仕がないという考えは）あまりにも冷たすぎるのではないかと感じた」「班の人が「自分たちの今の幸せは、国の発展に犠牲者がいたからで、その犠牲者がいたことを忘れてはいけない」というのを聞いてとても苦しかったが、どう反論すればいいかわからなかった」というように、全員が「少数の犠牲」を肯定しているわけではないが、反論するために自らの思考を言語化するというプロセスでつまずいている生徒がいることを認識することになった。

第3章「帝国主義と科学」では、電信の軍事的有用性が認識されるようになった結果、九州・釜山間に電信線が敷設され、次いで海外進出・アジア侵略の兵站幹線として鉄道が敷設されたことが明らかにされている。朝鮮半島における鉄道敷設は日本の土建会社が請け負い、日本軍の銃剣下で労働力と建築資材を安くほとんど思いのままに調達できる状況下でなされ、建設に要した費用は日本の大手建設会社に還流された。また日清戦争の賠償金を元手に八幡製鉄所が建設され、日露戦争で満州の鉄と石炭を確保し、朝鮮半島を植民地として獲得することによって、日本の産業革命は完成した。

こうした中、日清戦争の賠償金によって京都帝大がつくられ、足尾銅山鉛毒事件を起こした古賀鉱業の寄付によって東北帝大と九州帝大は生まれた。帝国の発展と共に生まれた帝国

大学は、国家第一主義と実用主義を理念に掲げ、電気工学と共に地球物理学に多くの研究がさかれていたが、これには軍事的な要請が関わっていた。日露戦争で日本軍が戦っていたのは、ロシア兵のみならず、満州の大陸気候だった。つまり海洋研究や気象観測事業と戦争や植民地獲得は密接な関係にあったのである。一方で帝国大学における研究のみが、戦争とながっていたわけではない。例えばGSバッテリーは、京都の鍛冶屋が起業した島津製作所二代目の島津源蔵が作った蓄電池であり、日露戦争で使用されることによってその性能が証明されることとなった。また、乾電池は時計の修理工だった屋井先蔵が世界に先駆けて作ったものであり、陸軍が電信機の電池に発注し、中国大陸で使われることによって性能が証明された。島津も屋井も高等教育を受けておらず、彼らを動かしたのはいわば「ものづくりに対する情熱」だったが、明治期においてこうした先端的技術の市場は軍需市場しかなかった。そのため、民間に先端産業の存在しないこの時代に実用主義の協力対象は必然的に軍となつたのである。こうして下からも学と軍の協働は進められていった。

生徒からは「発展というものは競争によって生まれるものだと思っており、戦争という軍事における競争がなければ産業や教育の発展はないのではないか」「技術の使い道の中には戦争によって見出されたものもあり、必ずしも否定的にとらえることはできないのではないか」といったコメントがあった。これを受け「科学技術を生活に有用なもののみに限定して使うことは可能か」「戦争なしに科学技術を発展させることは可能か」という論点でディスカッションを行った。各班からは「軍事的に転用できる以上、生活と軍事のラインを引いたり、規制を設けたりすることは難しいのではないか」「軍事転用を防ぐために、科学技術の開発を止めることはできない」というコメントが出された。このようなコメントを見ると、自らが主体となって、科学技術の犠牲となっている人々の生活に思いをはせたうえで、「科学技術」という欺騙に切り込んでいくという姿勢を輪読のみで涵養するのは難しいと感じたようになつた。さらに「開発を止めることはできない」というあきらめの姿勢は、加害性を無意識にあらわしたものであり、当事者性に欠けた発言であることを、フクシマ・オキナワの「現場」で考えさせが必要だと感じた。一方で、こうした現場でなくとも、より深く科学技術がもたらす加害性について考えさせができる發問ができなかつたか、課題の残る授業となつた。

第4章「総力戦体制に向けて」では、第一次世界大戦において西欧諸国の自然学者が、一斉に「愛国者」となり、それぞれの国で戦争に率先協力するようになっていった過程について書かれている。こうした「科学技術研究への国家による科学者の動員」は、日本においても大戦中の研究機関創設ラッシュに見ることができる。第一次世界大戦を通して日本が学んだことは、これから戦争が軍事だけでなく、政治・経済・思想・文化の全方面で戦われる総力戦であり、そのために平時の産業生産能力や研究開発能力を高め、潜在的軍事力を高

めなければならないということであった。例えば、1918年に出された「軍用自動車補助法」は、軍の規格にあわせた自動車を製造すれば補助金を出し、そのかわり戦時には、それを軍が徵発するというものであった。こうして欧米に比べて大きく遅れていた日本の自動車産業は、市場原理ではなく軍事的要因によって成長を促すことになったのである。また同じ年に陸軍は平時から生産力や備蓄資源を調査し、必要に応じて國家が工場を囲い込み、業務について命令を下しうることを定めた「軍需工業動員法」を起案している。この根本的意図は、来るべき総力戦に向けて企業を軍の統制下に置き、産業構造を軍事的に再編成すること、すなわち総力戦体制の形成にあった。

また、朝鮮半島をはじめとした植民地は、総力戦体制の実験場となった。例えば、のちに水俣病をおこすことになる日本窒素肥料は、朝鮮総督府が推進した「産米増産計画」に基づき、鴨緑江の電源開発をベースに電力と化学工業を結合させた巨大コンビナートを建設した。そもそも日本の化学工業は「国策産業」として始まったものであるが、とりわけ窒素を扱う肥料工場はそのまま爆薬工場に転換しうるものであり、肥料産業は「国防産業」でもあった。また、琵琶湖の半分の大きさの水豊ダムの建設のために、軍の力を用いて数万人の朝鮮人・中国人の強制移住が行われた。当時現地で働いた日本人技術者の回顧に「あれだけ電力が豊富でも、電気がついているのは日本人の住宅付近だけです。興南だけがバラっと電気がついていて、山ひとつ越えればもう電灯はない」とあるように、巨大発電所の電力は、すべてコンビナートと日本人住宅だけに使用されていた。土地を奪われ、強制移住させられたうえ、過酷な労働に駆り出された現地の朝鮮人や中国人には何の恩恵もなかったのである。

生徒からは「前回と同じく弱者の犠牲なしに科学技術の発展は可能だろうか」「科学技術は軍との関係なしに発展しえなかつたのだろうか」というコメントが出され、この論点にもとづいてディスカッションが行われた。前回の反省をふまえ、現在問題になっているデュアルユースの問題や大学における軍事研究、武器輸出の話などを筆者が行い、これらが「過去」のことではなく、現在進行形の問題としてつながっていることを意識させた。そもそもこうした現在の問題について知らない生徒がほとんどであり「植民地を持たない今の私たちと関係ないと思っていたが、根っここのところでつながっており、歴史は繰り返すのではないかを感じた」「私たちも「弱者」にされうる可能性があるのではないか」といったコメントも見られた。

第5章「戦時下の科学技術」では、資源の収奪を目的として行われた大東亜共栄圏の建設に科学がどのように関わっていたか、明らかにしている。例えば1941年に出された「科学技術新体制確立要綱」には、目標として「高度国防国家完成の根幹たる科学技術の国家総力戦体制を確立し、科学の画期的信仰と技術の躍進的発達を図るとともに、その基礎たる国民の科学的精神を作興し、以て大東亜共栄圏資源に基づく科学技術の日本的性格の完成を期

す」とある。こうした国策に対して、国民はどのように反応したのだろうか。山之内（2015）は、すべての日本人を「天皇の赤子」とし、国家への奉仕を強要するために社会全体の合理的編成替えが行われたことを指摘している。例えば「健民健兵」の実現のため、厚生省が陸軍の主導で内務省から分離・設置され、ツベルクリン反応、X線検査、BCG接種といった結核予防システムが採用された。さらに食糧管理制度が創られるなど、総力戦体制の下では、逆説的に労働者や農民の経済的・社会的地位は向上した。山之内はこれを「戦時動員体制（warfare-state）と福祉国家体制（welfare-state）の同一性というパラドクス」と呼び、これらによって下からのファシズムへの協力が行われるようになったと指摘している。

このような「アメとムチの政策」は、現在も沖縄基地問題にみることができる。現在名護市では、基地の受け入れと引きかえに道路や下水道の整備、防災備蓄倉庫の建設、給食費の無料化などの政策が進められている。こうした社会资本の整備や社会保障政策とのパッケージ化が現在も行われていることに対し、生徒からは「結局社会福祉に用いられる財源は国民の血税であり、総力戦体制と切り離しても当然進められるべきでないのか」「人々の健康のためとはいえ、その健康の目的が軍事的成長だとすれば、意味がない。そういった中身のない国の成長は、どのような意味があったのだろうか」というコメントが見られた。

第6章「そして戦後社会」では、アジア・太平洋戦争の敗北以降、科学者は戦争をどのように総括したのかという視点で戦後社会の分析が行われている。戦後、戦争協力への反省や軍事研究に携わったことの悔恨を表明している科学者はほとんどいない。例えば湯川秀樹が「総力戦の一環としての科学戦において残念ながら敗北を喫した」と述べたことに代表されるように、敗北の原因として「科学戦の敗北」「科学の立ち遅れ」がさかんに語られるようになったのである。戦時下の科学技術史研究の第一人者である沢井（2015）は、科学戦で敗北したという総括が、米国が日本にできなかった原爆製造に成功したということを前提に語られており、日本軍が中国大陸の泥沼の中で身動きが取れなくなっていたという事実に触れられていないという点を指摘している。そのうえで「戦争が終わり、だれもがアメリカの物量、科学技術に敗れたと納得すればするほど、中国に敗れたとの意識は希薄化したように思われる。敗戦によって明治以来の欧米に学ぶ姿勢は再強化されたものの、アジアに学び、また他国・他民族を帝国に編入したことの重さを考え続ける技術者は少なかった」と述べている。このようにアジア諸国に対する加害性を隠蔽し、「唯一の被爆国」として敗戦を総括することによって、これからは科学技術の振興が必要となる——そのためには、政治的にも経済的にも科学と科学者を優遇せよという論理が作られていったのである。

1950年に朝鮮戦争が始まると、日本は米軍の兵站基地の役割を果たすこととなる。そもそも日本がこうした特需に応えることができたのは、戦時に軍需生産に従事していた民間の技術者がそのまま企業に残っていたこと、軍の研究機関の研究者や技術者が民間企業に転

職していたことにある。朝鮮戦争が休戦に入り、防衛庁と自衛隊が設置されると、企業による本格的な軍事技術開発が始まることとなる。例えば第一次防衛力整備計画が出された1958年に防衛庁と契約を行った上位10社は、新三菱重工業、川崎航空機、スタンダード石油、石川島播磨重工業、三菱造船、浦賀船渠、東京芝浦電気、三菱電機、三菱日本重工業、富士重工業となっている。なお2015年の上位10社は、川崎重工、三菱重工、IHI、三菱電機、NEC、東芝、ジャパン・マリンユナイテッド、富士通、コマツ、住友商事であり、防衛省や自衛隊高級幹部の多くは、退職後これらの企業に天下りを行っている。このように現在も科学と戦力の接合は行われている。

一方で官・学・産、つまり官僚機構と企業、大学の協働体制も維持され続けた。公害や労災、薬害の問題が起こった際、こうしたことの隠蔽や責任回避に手を貸してきた権威ある科学者は大勢いる。水俣病を例にとると、現場で調査を続け、原因をチッソからの廃液中の有機水銀による中毒と突き止めた人々の意見は、一流大学の教授という肩書と、その世界の有力者という権威をもった科学者の「学会内では諸説があり、原因は確定されていない」という言葉によって一蹴された。こうした見解は、マスメディアを通して広められ、患者サイドの告発は踏みにじられたのである。その間、企業の責任が問われないまま事態は進み、その間も新たな患者は発生し続けることになった。

明治以来、国策大学として創られた帝国大学の学問は、戦後も「専門家」の発する「科学的見解」として権威づけられ、国家と大企業に奉仕してきた。つまり「専門家」や「専門の知」は、総じて企業や行政をはじめとした権力の側のものとして使われていったのである。

生徒たちの間には「私たちが知っている会社が軍需産業と密接な関係にあることに驚いた」「科学技術人材を育成するという目的のもとにSSHが指定され、そうしたことにお金が使われているが、それは実は危険なことではないのか」といったコメントが見られた。

第7章「原子力開発をめぐって」では、戦後日本においてどのように原子力開発が行われたか、簡潔にまとめられている。原爆投下直後に、広島で大本営調査団として現地調査を行い、この爆弾が原爆であることを日本で最初に確認したのは、戦前の日本を代表する物理学者であり、日本陸軍の原爆開発計画の中心にいた仁科芳雄である。仁科は翌年『世界』において「原子爆弾は有力な技術力、豊富な経済力の偉大な所産である」「(原子力を)動力源とすれば産業又は文化上の利益は驚くべきものがあるはずである。実際原子力は、むしろ徐々に発生させることの方が、爆発させるより易しいのであるから、利用の可能性は多分に存在する」と述べ、非軍事的利用に対して楽観的な考えを持っている。実際に当時は、原爆を用いて台風の進路を変える、大規模な土木工事に使うというような夢物語が大まじめに議論されていた。こうした中、仁科の下で原爆研究に従事していた武谷三男は、1952年に雑誌『改造』の増刊号で、次のように原子力研究に取り組むべき理由を表明している。

日本人は原子爆弾を自らの身に受けた世界唯一の被害者であるから、少なくとも原子力に関する限り、最も強力な発言の資格がある。原爆で殺された人々の靈のためにも、日本人の手で原子力の研究を進め、しかも、人を殺す原子力研究は一切日本人の手では絶対に行わない。そして平和的な原子力の研究は、日本人が最もこれを行う権利を持っており、そのため諸外国はあらゆる援助をなすべき義務がある。

この翌年、ソ連が水爆の保有を公表したことを受け、米国大統領のアイゼンハワーは「平和のための原子力 (atoms for peace)」のスローガンのもと、国際機関による核の共同管理を訴えた。しかしながら実際に行われたのは、米国による二国間協定による核技術と核物質の供与の提唱であり、「原子力の非軍事的利用」と「民生用利用」という流れであった。こうして米国は、自国で原子力産業を育成するために、将来有望な原子力市場となるであろう国に、原発と余剰の濃縮ウランを売り込み、それに付随して留学制度を設け、受け入れた留学生に核技術の教育を施すようになっていった。

日本では、こうした呼びかけに対し、1954年に原子力予算が、翌年には「公開・民主・自主」を原則とする原子力基本法が成立する。米国がビキニ環礁で水爆実験を行い、ミクロネシアの多くの住民、そして立ち入り禁止区域外で操業していた第五福竜丸ほか多くの漁船が被曝した直後のことであった。さらに日本のメーカーや電力会社は、技術者を米国に留学させ、米国から与えられた資料や文献を学ぶところから原子力開発を始めた。これは明治初期に工部省が行った技術者教育のやり方と全く同じであり、「自主」もなにもあったものではなかった。さらに通産省は「原子力开发利用長期計画」を定め、国策として原子力開発を行うようになり、政・官・産・学・メディアからなる「原子力ムラ」が形成されることとなったのである。

明治以来、「富国強兵」から「大東亜共栄圏」を経て戦後の「国際競争」にいたるまで、科学技術開発は一貫して国家の「国富」を増やすことを目的として語られてきた。しかしながら、2014年に福井県の大飯原発の運転差し止めを住民が求めた裁判において、福井地方裁判所はその請求権を認め、「生存を基礎とする人格権は、憲法上の権利としてすべての法分野で最高の価値を持ち、原発稼働のような経済活動の自由の上位にある」としたうえで、次のように述べている。

コストの問題に関連して国富の流出や喪失の議論があるが、たとえ本件原発の運転停止によって多額の貿易赤字が出るとしても、これを国富の流出や喪失というべきではなく、豊かな国土とそこに国民が根を下ろして生活していることが国富であり、これを取り戻すことができなくなることが国富の喪失であると当裁判所は考えている。

第2節 期末考査における生徒のアウトプット

こうして展開してきた授業を生徒はどのように受け取ったのだろうか。本節では、これらをはかるために、期末考査でどのような出題を行い、生徒がどのように回答したのか、代表的な解答例を紹介する（一部誤った認識に基づくものもあえてそのまま掲載した）。なお試験は持ち込み自由とし、100分で行った。

問1 【適切に情報を抽出し、問題の理解ができているかを確認するための問題】

明治時代の日本人は、西欧の「科学」「技術」または「科学技術」をどのようにとらえ、なぜ「科学技術」を発展させが必要だと考えたのか、まとめなさい。

生徒A

「科学」は大学などで学ぶことができる人が学ぶ、高等教育機関でおこなわれる教養であり、「技術」は職人による技や知恵、経験などによって発展するものである。「科学」と「技術」はそもそも全く違うものであり、別々に営まれていた。しかし、明治時代の日本人は、「科学技術」を科学によって導き出された技術という意味でとらえ、科学を技術に用いるための補助学と考えた。重要視されたのは、科学における世界観・自然観という思想ではなく、実用性に重きを置いた技術である。このようにすでに西欧から後れを取っていた日本は、技術を軍事に使用し、西欧に追いつくために、すばやい「科学技術」の発展を必要とした。

問2 【適切に情報を抽出し、問題の理解ができているかを確認するための問題】

問1のような考え方をもとに、日本という国家は明治時代から現在に至るまでどのように科学技術政策をおしそすすめ、どのような結果をもたらしたか、まとめなさい。

生徒B

明治期における科学技術政策は、欧米の技術のまま日本に輸入して「殖産興業・富国強兵」としたことにはあらわすことができる。これは資本主義経済の形成と発展、そのことによる経済的・軍事的強國化、お雇い外国人による教育と組織的な海外留学による科学技術の一からの習得によって可能となった。こうした中、「国益」追求のためには、少数者の犠牲はやむを得ないという論理があったため、弱者は非人道的な労働をさせられたり、環境汚染によって苦しめられることとなった。

大正・昭和期における科学技術政策は、総力戦体制であったといえる。第一次世界大戦を見た日本は、自国の科学技術力が軍事力へ直結することを再確認した。そのため、産業

より軍事という考えが強まり、各種研究所が設立される。また、平時の産業生産能力や研究開発能力は、潜在的軍事力であり、その国力のすべてをいかに有効に使うかが戦争に勝つかの条件となる。こうして国家総力戦体制は作られた。

戦後日本は敗北し、G H Qにより軍隊は解体されたが、官僚機構はあまり変わらなかつた。その後朝鮮戦争によって日本は高度経済成長を果たす。しかしその背後には、深刻な公害と自然環境の破壊があった。これに向き合はず、うやむやにしていたところ3. 11が起こり、日本は破綻を迎えたのである。

問3 【問題に応じて知識を構造化し、創造的思考を促すための問題】

筆者は本文中において「科学技術の急速な振興と、それによる急ピッチな生産拡大は、その背後でつねに弱者に対する犠牲をもたらしてきた」と述べている。「弱者」とはどのようなものか、なぜ「弱者」は創られてしまったのかをふまえたうえで、このような「弱者」にどのように向き合う事ができるか、あなた自身の考えを書きなさい。

生徒C

科学技術総力戦体制は、軍をトップとして産・学・官が一体となることで可能となっていた。弱者とは、こうした総力戦体制の下で、被害を被った人々のことである。科学技術は戦争を伴うことによって、爆発的な推進力をもって発展していった。現在の技術の本流をたどれば、それは「戦争の技術」ということができるだろう。また原発も、潜在的軍事力ということができる。これまでの科学技術の開発はほぼすべてが戦争によつたものであり、そこに弱者が生まれるのは必然であった。戦争において弱者を生まないことは不可能である。

弱者と向き合うこととは、日本の体制にまず疑問をもつことである。総力戦体制を解体することで、弱者は生まれにくくなる。弱者が今まで虐げられてきた史実を見て見ぬふりをするのではなく、それを事実として認め、生かしていくことが一番大切だと思う。

生徒D

弱者とは、国が発展するために虐げられ、犠牲になってきた人のことである。経済的に力のない人、開発のために今まで住んでいた土地を奪われた人、公害の犠牲になった人…様々な弱者が存在する。こうした弱者は、国のトップに立つ人たちの「国を発展させるためなら多少の犠牲は仕方がない」という考え方のもと、様々な政策を推し進めることによって生まれてきた。確かにそのおかげで、日本が急速な経済成長を実現してきたのも事実だし、犠牲を顧みずに政策を進めてきたからこそ今の日本があるのかもしれない。しか

し、「弱者の犠牲があったからこそ、日本はここまで発展したのだ」と開き直って、弱者の犠牲を生むことを正当化してはならない。

むしろ、国を発展させることだけのために弱者を犠牲にし続けてきたことを認め、これから日本の日本で新たな犠牲を生まないようにすることが大切である。自分が弱者にならないためにどうすればいいかではなく、弱者を生まないよう、どうすればいいのかを考えることが必要である。そうした意味では、国は自国の発展を第一の目的にするのではなく、国民の格差をなくすことを一番に考えるべきだ。

問4 【様々な情報相互の関係性を再構成し、表現するための問題】

「おわりに」において、筆者は「これまでの近代日本一五〇年の歩みから最終的に決別すべき時が来た」としたうえで、「経済成長を持続しなければならないという命題そのものが問われている」としている。この本を一読したうえで、あなた自身または日本という国家は今後どのような道を歩むべきだと考えるか、あなた自身の考えを書きなさい。

生徒E

日本は唯一の被爆国として、科学によっていかに恐ろしいことが起こるか、分かっているはずである。また、福島における原発事故を通して、「絶対」に安全なものなどないことを、身をもって体験している。それにも関わらず、日本のトップの人たちは、戦争に意欲的であるとれる発言をしたり、原発の再稼働を進めていたりする。一番の問題は、こうした偉い人たちでなく、国民が被害を受けるということである。ここまでたくさんの弱者が犠牲になってきたという事実を、私たち国民はもっと知っておくべきだ。こんなにもたくさんの犠牲を出すことを知っているながら、経済成長のために本来の正しい使い方とはいえない方法で、科学技術をさらに発展させようとするなら、それは間違いである。トップが違う道を進もうとしていたら、国民が止めることができるくらい、全国民が日本の現状について知っておくべきだ。

生徒F

これまで日本における「発展」とは、国の立場を保つための成長競争が根本になっていた。しかし私は、発展という言葉を使うときに、これからは経済成長ではない国民の生活や幸福の向上を軸とした「豊かさ」という方向に進めていくことが大切だと考える。まず「拡大」と「成長」が同義になっているという事実がある。科学技術幻想に終止符が打たれた今、以前と同じとらえ方をしていいはずがない。すなわち、経済成長の持続のために、やみくもに生産を拡大すればよいわけではないのだ。例えば、国民の豊かさを考えるのなら

ば、今無理やり拡大しようとしていることを、縮小しても構わないのである。

また、総力戦体制と同じ構図になることによって、過ちは何度も繰り返す。体制を解体し、特にメディアと国家を完全に切り離すことが求められる。メディアは人々を国単位で動かす力があるからだ。スポンサーをつけないなど、何かの息がかからないようするための、革新的な政策も必要になるだろう。そして最後に戦争と決別するために、潜在的軍事力にすがりつかない、戦争ではない国民の豊かさを求めるべきだと考える。

試験の答案をまとめると「科学技術の開発はほぼすべてが戦争によったものであり、そこに弱者が生まれるのは必然」であった。そして「弱者が今まで虐げられてきた史実を見て見ぬふりをするのではなく、それを事実として認め、生かしていく」ことが必要である。そして「自分が弱者にならないためにどうすればいいかではなく、弱者を生まないよう、どうすればいいのかを考え」るために、「日本の体制にまず疑問をもち、「戦争ではない国民の豊かさを求めるべき」ということになる。

輪読を通して、生徒たちは「科学技術」が創られる過程について学び、それを疑わなければならぬという学んだ。しかしながらそこには、過ちを繰り返さないために「客観的に事象をとらえ、考えなければならない」という意識が根底にあるように見える。

こうしたいわば「模範解答」的な考えを持つつ、生徒たちはさまざまな問題が起こっている「現場」では、そもそも「客観的に判断」することなどできない状況に置かれていたのではないかということも体感的に感じていた。例えば『原発メルトダウン』において「原発で働く作業員を守るためにペントを中止すべきか、東日本を守るためにペントに作業員を向かわせるべきか」という判断を迫られた吉田所長の苦悩のドラマを見た後に、ある生徒が筆者に次のように話しかけてきた。「福島の人たちは、安全だといわれて原発を受け入れて、結果として事故の時には命がけで原発を守ってきたんですよね。東電の職員は、加害者として語られがちだけど、こうして原発を守ろうとした人を一概に加害者と言えるんですか？この人たちは、東電で働いていたというだけで、今は加害者にさせられているだけなんじゃないでしょうか？そもそも福島の人が弱者だったとか強者だったとか、そんな簡単に分けることができるんでしょうか？」さらにこの生徒は次のように続けた。「日本の体制に動かされてきた科学者は犠牲者、つまり弱者だったという視点もあっていいのではないですか？」

このように話しかけられたとき、筆者は本来「被害者」である人々が「加害者」として生み出されてしまう——つまり「弱者」が「弱者」として生み出されてしまう背景や構造をより詳細に「現場」で見たいという想いが生徒にあることを知った。これらをふまえたうえで「学宿」という方式で行ったのが、フクシマ・オキナワにおける実地調査である。

第3章 フクシマ実地調査

第1節 学宿としての実地調査

前章で小括した通り、生徒たちが輪読で得た知識をもとに、「現場」においてどのようなことが起こり、そこに住む人々はどうしようとしているのかを知ったうえで、私たちはどうすればよいのかということを考えるために行ったのが実地調査である。歴史が招いた負の側面に重点をあてた旅行は、いわゆる「ダークツーリズム」に分類されることが多い。しかしながら、本授業で行った実地調査は、ダークツーリズムではないことをまず明確にしておきたい。そのためにも、井出（2013）が行っているダークツーリズムの定義をまず見てみよう。

ダークツーリズムとは、戦争や災害といった人類の負の足跡をたどりつつ、死者に悼みを捧げるとともに、地域の悲しみを共有しようとする観光の新しい考え方である。（中略）日本では沖縄の戦跡や広島の原爆ドームへの修学旅行など、学習観光の一環として馴染みの深い旅行形態であろう。ただ、ダークツーリズムの根源的意義は、悲しみの承継にあるため、学習そのものが目的ではないことにも注目しておきたい。訪問地に存在する悲しみを知ることで、学びは必然的に達せられることとなる。したがって、ダークツーリストを志すとしても、はじめから何か学ばなければならないという気負いをもって旅立つ必要はなく、自分の心のひだに触れた何らかの事件や事象があれば「その場を訪れたい」という素直な気持ちに従ってよい。

人類の悲しみの歴史を受けとめようとするとき、ツーリズムは非常に意味のある方法論である。ある場所で生じた悲しみは、その場にいてこそ、そのつらさや辛さをリアルに感じることができる。そして外部の来訪者が訪れることで、悲しみは共有され、地域の人々は癒しを得られる。同時に地域の悲しみはツーリストを通じて外部に伝播していく。その結果として、時代や地域を超えた普遍的な悲しみの存在が認知されるようになり、そのいくつかは「構造的なつながり」を持つことになる³。

ここではダークツーリズムの根源的意義として「悲しみの承継にあるため、学習そのものが目的ではない」としたうえで、「外部の来訪者が訪れることで、悲しみは共有され、地域の人々は癒しを得られる」とされている。まず「悲しみの承継」を根源的意義にしている点が、本授業の「生徒が主体となり社会的討議を行うことによって、科学が人々の生き方に与える影響について考察する」という目的と大きく異なる。そもそも原発事故が悲惨な現状を

³ 東（2015）は、こうした観光客がデリダのいう「郵便的」あるいは「エクリチュール的」にマルチチュードとなる可能性について論考を行っている。しかしながら東自身が「結果的にそこに連帯が存在するかのように見えてしまう錯覚の集積」と述べているように、こうした学習なき偶然性に「構造的なつながり」や「連帯の可能性」を見出すことができるという考えは、いささか楽観的すぎるといえよう。

招き、現在に至るまで多くの人々の生活に影響を及ぼしていることや沖縄戦によって多くの方が亡くなり、その後のアメリカの支配を経たうえで、沖縄が過重な基地負担を強いられているという事実は、生徒にとって自明のことである。こうした「悲しみ」に直面することによって「学び」が「必然的に達せられる」とすれば、それは「悲しみの消費」にすぎない。こうした「現場」における学びにおいて重要なのは、こうした「悲しみ」がどのような構造によって生み出されてしまったのかという問題提起であり、それに向き合う姿勢である。またその際に、こうした「悲しみ」を「人類の悲しみの歴史」として抽象化することは避けなければならない。「現場」においてすべきことは、「悲しみ」が生み出される構造を詳細にたどり、その過程において自分自身がどのように関わっているのか、もしくはこれから関わる可能性があるのか、当事者性をもって具体的に考察することである。

こうした意味において「外部の来訪者が訪れることで、悲しみは共有され、地域の人々は癒しを得られる」とする視点は、「悲しみを知る私」と「それによって癒しを得る地域の人々」というオリエンタリスティックな視点であるといえよう⁴。私たちが「現場」を訪れても、そこに住む人の生活は変わらない。それは、私たちがそこに住んでいないからである。こうした現実を受け止めたうえで、私たちに何ができるのか、現場において社会的討議を行うことが実地調査の目的である。

これをふまえ、フクシマ・オキナワにおける実地調査は、皆で同じ宿に泊まりながら、たえず学び、考え続けるという「学宿」というスタイルをとった⁵。それでは、実地調査においてどのような「学び」があり、討論が行われたか、見ていくことにしよう。

第2節 <1日目> 炭鉱から原発までの歴史を学ぶ

1日目は、常磐炭鉱の産業遺跡群の見学と元東電社員の吉川彰浩さんとの対話を通して、この地域がどのように首都圏へのエネルギー供給地となっていましたか、またエネルギー革命

⁴筆者は2018年の5月にウクライナのチェルノブイリ原子力発電所やその事故によって被害を受けたプリピヤチ市を訪れるツアーに参加した(現地ツアーカンパニーを利用)。そこにおいて行われていたのは、コーディネーターが原発を見ることができる高層マンションの屋上や30年近く放置されている観覧車、荒れ果てたプールなど「SNS映え」するポイントに観光客を誘導し、人形や手紙といった小道具を「配置」したうえで、観光客にそれらを撮影させ、「悲しみの象徴」として投稿されることによって、新たな観光客を獲得するというオリエンタリスティックな共犯関係であった。こうしたツアーにおいて、原発事故が起こった構造的原因や責任主体に関する説明はほとんどない。つまりこうしたダーツツーリズムは、その地に住んでいた人々と分断された状態で存在しているのである。そのような分断された場において「地域の人々と悲しみの共有」を見出すことなど到底できない。

⁵「学宿」という考え方とは、現在福島県が進めている「ホープツーリズム」という教育旅行で用いられているものである。これは、フクシマのありのままの姿と前例のない困難を現地でインプットしたうえで、震災や原発事故の教訓を活かすために現地で討論を行い、アウトプットさせるプログラムとなっている。今回の実地調査はこのプログラムに基づき、福島県ならびに福島県観光物産交流協会の協力のもと行った。

によってどのように観光・原子力産業への転換が行われたか、その過程を学びつつ、翌日の原発見学に向けて各々が問題提起をすることができるよう、行程を立案した（資料2）。

当日はまず、上野駅から湯本駅に向かったのち、いわき市石炭・化石館ほるるにて、いわきヘリテージツーリズム協議会の菅野昭夫さん、熊澤幹夫さんにお話いただいた。常磐炭田の特色としては、他の産炭地に比べて京阪地区に近いという地域的優位性があること、炭質が低品位炭であり、コークスとして利用することができないこと、そのため火力発電所における燃料としてこの地から採掘された石炭が用いられたこと、本層が一層しかなく、採掘地の移動が速く、随所で採掘が行われていたことなどを学んだ。その後模擬坑道に移動し、幕末から明治初期にかけては、ツルハシで採炭を行っていたものの、明治中期に「科学技術」の導入によって動力や機械が導入され、発破採炭へ変遷していったことを学んだ。上半身裸の女性が作業しているマネキンの前では、「鉱夫労役扶助規則」によって、原則として女性の坑内労働は禁じられていたが、実際には多くの女性が「特例」を用いて働いていたこと、さらに戦時下の増産体制時には、労働力不足を解消するために坑内就業が解禁されたという説明があった。このように人権上大きな問題を孕みながら、戦時中の総力戦体制は作られていたのである。戦後、復興のための傾斜生産方針が定められ、朝鮮戦争が起こると常磐炭鉱は最盛期を迎えることとなる。機械採炭が主流になったとはいえ、落盤事故は多く続き、またメタンガスが発生すると、拡大を防ぐために、人が働いていたとしても、発生地点の双方をふさぐことによって酸素をなくし、鎮火させるという手法がとられていた——つまり、その間にいた人は窒息状態に陥り亡くなることとなった、というように輪読だけでは決して得ることのできない炭鉱の実情について学ぶことができた（写真5）。

次に向かったみろく沢炭鉱資料館では、実際に露頭している炭層から直接石炭を取り出したり、電気ランプが普及されるまで一般的に使われていたアセチレンランプのしくみを学ぶために実際に炭化カルシウムと水を反応させ、明るくなることを体感した。さらに『フラガール』にも登場する現在わずかに残る炭鉱住宅や共同便所を見学した後に、選炭工場跡に入ることによって、当時の街の様子や人々の生活を想像した。このように常磐炭鉱遺産の実地調査では、軍・産・官の協働関係と科学技術の発展が不可分であったことや、そのもとで人々がどのように生活してきたか、実際に現場を歩くことによって知ることができたといえよう。生徒の感想には「女性が法を無視して働かされていたことを知り驚いた」「炭鉱生産も原子力発電も、結局誰かの命を犠牲にしてこの国が発展してきたんだと改めて感じた」というものが見られた。

宿泊先のスパリゾート・ハワイアンズに着いてからは、常磐興産顧問の坂本征夫さんから、炭鉱業から観光業への転換がなぜ可能だったのか、実際にその歴史に携わってきた立場からお話をいただいた（写真6）。そもそも本州最大の炭鉱会社であった常磐炭礦は、1944年に

ご旅程表

福島県知事登録旅行業第2-362号
公益財団法人福島県観光物産交流協会

中央大学附属中学・高等学校様

【団体名】中央大学附属中学・高等学校「ふくしま学宿」

ご旅行先 南東北(福島県) ご参加人員 計22名様(生徒20名+引率者2名)

旅行期間 2019年10月22日(火)~10月24日(木) ※2泊3日

福島県福島市三河南町1-20
コラッセふくしま 7F TEL960-8053
TEL:024-525-4060 Fax:024-525-4087
観光部長:武藤 淳
総合旅行取扱管理者:庄條 久徳
作成者:大関 秀樹
作成日:2019年4月16日

日次	月日(曜)	行程	食事
1	10/22 (火)	ひたち5号利用予定 貸切バス利用予定 JR上野駅 —JR湯本駅—○いわき市石炭・化石館(まるる) 9:00発 11:17着/11:30出発 11:40~12:40 ■昼食(列車内弁当) ○常磐炭鉱遺産のフィールド学習 いわき市・宿舎(泊) 12:55~14:45 15:00 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 12:55~13:35 みるく沢炭鉱資料館 13:45~14:05 街歩き(炭住等) 14:05~14:45 遺炭工場ほか </div> HM①いわきヘリテージツーリズム協議会 副会長 (元常磐炭礦(株)社員)坂本さんとの対話 16:40~17:00 福島県導入ガイダンス 17:00~18:00 HM②(一社)AFW吉川代表との対話 18:00~18:30 振り返り学習(学校主導) 18:30~20:30 夕食(レジャー施設内バイキング)、入浴等の自由時間 20:30~21:30 フラダンスショー (※御相談になります)	朝:— 昼:— 夕:— ※各自対応
2	10/23 (水)	貸切バス利用予定 いわき市内・宿舎—(いわき湯本IC)—(広野IC)—○東京電力福島第二原発構内見学— 7:50 9:00~12:00 ○大熊町・大熊食堂—○富岡復興メガソーラーSAKURA—○富岡町・夜の森地区— 12:40~13:40 13:55~14:25 14:35~14:50 ■昼食 ○東京電力廃炉資料館—△国道6号線(一部帰還困難区域)通過— 15:05~16:15 浪江町内—浪江町・宿舎(泊) 16:55~17:55 18:05 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 18:30~19:30 振り返り学習(学校主導) 19:30~ 入浴等自由時間 </div> ■夕食	朝:○ 昼:○ 夕:○
3	10/24 (木)	貸切バス利用予定 浪江町・宿舎—○浪江町フィールド学習—○浪江町地域スポーツセンター— 8:30 8:40~10:20 10:30~11:30 講話 11:30~12:20 昼食 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> ○JR浪江駅前周辺→○請戸小学校→ ○大平山靈園 </div> ○飯館村・ふれ愛館—○学校交流(福島高校)—○コラッセふくしま(お土産タイム)***** 13:40~15:00 16:00~18:00 18:20~18:50 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 【講話】HM④ 原子力規制委 元委員長 田中 復一さん </div> やまびこ 156号利用予定 *****福島駅—東京駅 19:00着/19:16発 20:48着	朝:○ 昼:○ 夕:(弁当)

●記入例/JR ■■■■■ 航空機 ▲ 私鉄 + + + バス ~~~ ロープウェイ + + + + + 徒歩 ***** ○入場見学 ○下車見学 △車窓

●お願い ご旅程は運輸機関のダイヤ改正および各地の道路状況により多少時間が変更になる場合がございますのでお手数でも現地で出発時間をご確認ください。

宿泊施設(ハワイアンズ:仮予約済、いこいの村なみえ:6ヶ月前予約)					
日次	月日	施設名	食事条件	連絡先	備考
1~2	10/22~23 (1泊2日)	スパリゾートハワイアンズ	1泊2食付	〒972-8326 福島県いわき市常磐原町蕨平50 TEL:0570-550-550	洋室利用予定
2~3	10/23~24 (1泊2日)	いこいの村なみえ	1泊朝食付	〒979-1525 福島県双葉郡浪江町高瀬丈六10 TEL:0240-34-6161	コテージ利用予定
貸切バス		食事条件		添乗員	
■全行程 中型貸切バス予定1台 ※バスガイドなし (利用予定バス会社名:報徳観光バス)		朝食:2回 昼食:2回(うち1回弁当) 夕食:2回		添乗員1名が同行し旅程管理を行います。 ※10/22・湯本駅～10/24・福島駅まで同行	

「見る」=施設見学等 「聞く」=各分野で復興に挑戦する人々との対話 「考える」=アップブリット

資料2 フクシマ実地調査の行程表

磐城炭礦と入山採炭が戦争遂行のための石炭増産という国策を受けて合併し、誕生した会社であるが、戦後も財閥解体によって分割されることなく、体制を維持してきたという歴史がある。最盛期、常磐炭礦は従業員 15,000 名、家族を含めると 50,000 名を養う大企業であり、いわきは企業城下町の形態を呈していた。こうした常磐炭礦を象徴する言葉に「一山一家」という言葉がある。これは、採炭に必要なガス、水道、ポンプなどをすべて自前で開発し、整備するなど「一山」を守るためのしくみを「一家」でつくりあげてきたという歴史であり、この地に暮らす人々の矜持であった。

こうした中、高度経済成長期に起こったエネルギー革命に対して、経営陣は石炭産業がこと後に立ち行かなくなることを予測する。そして石炭産業に代わる産業を創出することができないか検討するために、経営陣は世界一周の視察旅行に出かける。当時の記録を見ると、ドイツやイギリスの石炭産業の街を視察しているところに石炭産業への未練を感じるもの、アメリカではディズニーランドに立ち寄るなど、観光産業をはじめとした他業種への視察も旺盛に行っている。こうした視察の最後に立ち寄ったのが、ハワイであった。そこで出会ったのが、タヒチの太鼓の音とダンスである。経営陣は、この太鼓の音がいわきの村太鼓と似ていること、ハワイの温暖な気候が採掘に伴って温泉が噴出するいわきの気候に似ていることなどにヒントを得て、いわきを日本のハワイにするべく日本初のテーマパークである常磐ハワイアンセンターを開業することとした。

この時にこだわったのは、自前のストックである。開業時の 620 人の従業員のうち 617 人が、炭鉱で働いていた人夫とその家族であった。例えば、フラガールは東京の芸能プロダクションに発注すれば、3 分の 1 のコストカットをすることができたが、そうしなかったのはこれまですべてこの地域を自分たちの手で作り上げてきたという「一山一家」の矜持があったからである。こうしてフラガールの養成機関である常磐音楽舞踊学院が作られた。

坂本さんは今でもハワイアンズの中を歩くと、昼夜三交代制で働く従業員たちが炭で真っ黒になった炭鉱夫に、フラガールの舞台やプールがある巨大なドームがズリ山に見えるという。こうして全く異業種であったものの、炭鉱事業の特徴を生かし、その連続性を保ちつつ、人材を活かすことによって勝負するという企业文化を踏襲することによって「フラガールの奇蹟」は可能となったのである。

大地震、大津波、原発事故、風評被害という四重苦を乗り越えることができたのも、この「一山一家」という精神にあると坂本さんは指摘する。常磐炭礦は、石炭を採掘していた時代は、国の発展を支える石炭を「物質的エネルギー」として、常磐ハワイアンセンター時代は、国民の娯楽を「時間的エネルギー」として自分たちの力で供給してきた。こうした歴史をふまえ、震災時に築かれた「きずな」に応えるために、現在は復興へのモチベーションを高める夢や希望を「精神的エネルギー」として提供していると坂本さんは語った。

生徒からは「東電などのトップダウンの会社と常磐炭礦が組織として全く異なる企業文化を持っていることが分かったが、どうすればそのような企业文化を維持することができるのか」という質問が出された。これに対して坂本さんからは、「正しい問い合わせを持続すること、現場の判断を信じるという心を経営者が持つこと、対立が起きた時に相手を説得するのではなく、納得するよう話し合うことが大事なのではないか」という答えをいただいた。生徒の感想には「常磐炭鉱の改革はかなり稀な例だと感じた。トップに立つ人の感性が豊かでないと難しいような気がする」「炭鉱も観光も原発も現地住民との関わりや協力や生活に密着している。それゆえに、対話の仕方によってさまざまなことが起こりうる可能性があることがわかった」というものがあった。

坂本さんのお話の後は、元東京電力社員で、現在は福島第一原発と向き合いながら、この地域をどのように再興していくか考えるための団体（AFW）を立ち上げた吉川彰浩さんにジオラマを使いながら原発や廃炉に関するお話ををしていただいた。

吉川さんは、茨城県の生まれで、東京電力が日野市に設置していた東電学園高等部（原子力・火力コース）の出身である。当時東電に入ることは、花形であった。その後、福島第一原子力発電所で働くために双葉町で約10年間生活した。その後、福島第二原子力発電所に移動となり、浪江町で生活し、そこで結婚もした。この浜通りという地域は、自分自身の人生を形成してきた故郷であり、大切な地域である。

震災時には、福島第二発電所で被災した。そして、大切な故郷は原発事故によって帰還困難区域に指定されてしまった。避難生活を通して、自分自身がその地で生活していた人々と分断されてしまった。こうして辛い、受け止めきれない、自殺さえ考えたことがある中、いつも考えていることは、「何がいけなかったのか」ということと「これから何ができるか」ということである。実地調査を通してみんなに学んでほしいことは、知識や事実ではない。事実は東京で学ぶこともできるし、インターネットでいくらでも手に入れることができる。みんなに「現場」を歩くことを通して体得してほしいことは、これから日本をどのようにしていけばよいのかという「知恵」である。自分自身、福島第一原子力発電所のことを学び続けようと考えるようになったのは、地域の人々と、人生を楽しみたい、そういった余裕がようやく出てきたからである。人生を楽しみたいと思えるからこそ、自分にとってもっとも身近な問題である原発に向き合うことができる——というお話ををしていただいた。またジオラマを使いながら、自由に気になったことを質問するというスタイルで、現在の原発はどのようにになっているのか、原子炉内の話、凍土壁の話、汚染水の話など活発な対話が行われた（写真7・8）。

生徒からは「吉川さんの言葉から原発事故を起こしてしまったことへの後悔などが垣間見えたが、そのような人を多く原発事故は産んでしまったのだと改めて感じた。吉川さんのように加害者になってしまったことを悩んでいる作業員の方がたくさんいることも知ったが、

結局東京電力は悪だという考え方も捨てきれず、どうまとめればよいかよく分からぬ」「実際に当原発内にいた生身の人間に話を聞いてみると、全く感じ方が違った。映像や本では半分も伝わらないんだなと感じた。特に人の人生を壊してしまったという言葉にものすごく重みを感じた。エネルギー政策についてだけでなく、地域の人々を直接的にではなく間接的に死に追いやってしまった震災関連死についてもっと調べたい」というものが見られた。

生徒が「生身の人間に話を聞いてみると、全く感じ方が違った」と書いているように、常磐炭礦から観光業への転換を生身で体感してきた坂本さんと原発事故当時第二原発で勤務していた吉川さんのお話は、心に響くものであった。そうした中、お二方の話は、関東において震災時に福島で作られたエネルギーを享受していた私たちが、明日現職の東電職員に何を聞くことができるのだろうか、という自らの立ち位置を再考させることとなった。また、私たちは「現場」において事実を学ぶだけでなく、それを将来どのように「知恵」していくことができるのか、という大きな宿題もいただいた。

第3節 <2日目> 原発事故が及ぼした影響について考える

2日目は、福島第二原子力発電所（以下2F）構内の見学と東電職員との対話がメインとなる。原発構内に立ち入る目的としては、福島第一原子力発電所（以下1F）とほぼ同じ構造の原子炉建屋に入ることによって、原子炉や構内の大きさを実際に体感し、廃炉作業やデブリがある場所を想像することができるからである。原発のゲート前に到着すると、一人ずつ厳重な本人確認が行われたのちに、構内への入構が許可された。その後、セキュリティチェックは建屋へ入構する際に何度も行われることとなる。建屋内では防護服に着替えたのちに、最上階から核燃料プールの見学を行った後に、外側から原子炉格納容器や原子炉とタービン建屋を結ぶ途中にある巨大な主蒸気隔離弁（MSIV）の見学を行った。その後に、原子炉直下の格納容器に入り、デブリが落ちているとされている場所で、現在どのようにロボットを用いた作業が行われているか、説明を受けた（写真9・10）。さらに、津波に襲われた非常用電源設備があるタービン建屋や震災後に作られた防波堤の見学も行った。見学後は福島第二原発副所長の吉田薰さんをはじめ、東電社員の方たちと活発な質疑応答が行われた（写真11・12）。以下にそのやりとりを掲載する。

生徒：私の叔父は東電で働いている。原発反対という声や報道に対して、いろいろ思うことがあると言っているが、率直にそうした声をどのように感じるか。

東電：まず、原発事故を起こしてしまったという点に関しては、猛烈に反省しなければならないという部分がある。しかし、仮にすべて火力発電にした場合、ホルムズ海峡を閉鎖された場合にどのように考えるか。現在、第二次オイルショックの時よりも、中東への石油依存

率は高くなっている。今後、国のエネルギー政策がどのように推移していくか、当社としてはそれを見守るしかないが、もし原発が必要となった場合、ていねいに説明することで地元のみなさまの理解を求めるというのが基本的な姿勢である。

生徒：現場と本社の間で、特に1Fに関して乖離があったと思うが、実際どう思っていたか。

東電：テレビ会議で本社と1F、2Fが繋がっていた。2Fから見ると、1Fは国の横やりが入った。しかし2Fは電源喪失を免れたため、比較的マイペースに作業をすることができた。また、唯一繋がっていた送電線からケーブルを引きまわす際も、2Fは避難区域に入っていたため、関東圏の企業や協力企業の協力を仰ぐことができた。

生徒：汚染水が2週間で1タンクが埋まるほど増えているが、今後どうするつもりか。

東電：東電としては、まずは敷地を確保し続けるしかない。

生徒：そうすると、これを貯め続けるということか。

東電：国が基準を変えない限り、東電の判断だけで汚染水を海に流すことはできない。

生徒：構内見学では、パンクしないタイヤを備えた緊急車両を高台に置くなど安全対策をしているという説明があった。しかし、ハードルを上げれば本当に大丈夫なのか。

東電：まずは今後絶対に事故を起こさないということが重要である。そのために必要なことはするし、使えるものは使うというのが基本的な考え方だ。これからどのようなエネルギー政策を行っていくかということは国が定めるエネルギー基本計画による。そして、その中には当然自然エネルギーも入っている。原発の再稼働には新規制基準での判断が必要となる。それ以上に必要なのは、地元のみなさんが納得してくれるかということである。例えば、現在、柏崎原発の再稼働に関して問題となっているが、東電としてはお客様に安定した電源を供給したいという思いがある。そうした意味で、2Fで働いている身としては、2Fを廃炉にするというのは、非常にもったいない。しかし、廃炉は地元のみなさんの思いを受けたうえで、下した判断である。

生徒：そうした状況のもと、事故後に東電に入社する人たちは、どのような思いをもっているのか。

東電：自分たちが責任をもって廃炉を担う、福島を何とでも復興させたいという思いがある。

生徒：これまでトラブルや小規模な事故が起きた後に広告が増えるという手法で「原発プロパガンダ」が行われてきた。これまで正しく自分たちの考えを伝えてきたといえるのか。「原子力は安全です」「問題ありません」というふうに伝えてきたことに対してどのように考えているか。

東電：自分たちにとって都合のいいこと伝えるのではなく、きちんと理解してもらうための情報を伝えるという意味において、これまでそのようなことができていなかったと反省すべ

きこともたくさんある。

生徒：東電ということで、地元の人から偏見を受けることはないのか。

東電：これまであまりなかったが、地元のお祭りなどで「東電こないか？」というお誘いを少しづつ受けるようになった。また、そういったお誘いを受けたときは、しっかり制服を着ていくようにしている。例えば、最近だと水害によって設けられた入浴施設の受付を手伝ってもらえないかという話が来るので、社員を行かせている。

生徒：なぜ柏崎は再稼働に向かっているのに、2Fは廃炉にしたのか。

東電：廃炉にした方が、地元福島の復興につながるだろうという考え方である。ただ、東電としては、電力自由化によって他社に勝つ、安定して経済的な運用をしていかなければならぬという考え方もある。

こうして、東電との質疑応答の時間は終わった。バスに乗り込んだ後、生徒からは「中途半端にはぐらかされた感じがする」「リスクコミという手法をとられてしまうと、本質に迫ることができず、話がかみ合わなかった」という感想を聞くことができた。地元の人々は、このように血の通わない国や東電と鬭っているのである。その一方で筆者は、ご本人の口から語られることはなかったが、構内の案内や質疑応答の際にいらっしゃった上野恵美子さんが津波でご主人を亡くされているというエピソードを紹介した。上野さんは家族の安否もわからぬまま、2Fの復旧活動を懸命に行ってだったのである。そうした事実を抱えながら、上野さんは、今でも自らの生活の場を奪うことになった東電で働き続けている。上野さんだけではない。吉川さんもそうであったように、実際に1F、2Fで働く多くの人たちとは、この地で暮らしていた人である。こうした中、ここに東電 vs 住民という二項対立的な関係を見ることはほとんど意味のない行為であるといえよう。そしてこうした「現場」で生活している人は、みなそのことに気づいている。気づいているからこそ、切り離して考えることができない。だからこそ、地元の人々はこの問題について語ることができなくなっているのである。

午後は原発事故の影響で生じた遊休農地を利用して建てられた富岡復興メガソーラS A K U R Aを見学し、再生可能エネルギーの現状について、お話を伺った。ここでは、40haの土地に約11万枚の太陽光パネルがならべられており、年間3,300万kW（一般家庭約9,100世帯分）の発電がおこなわれている。20年間の期限つきで再エネ固定買い取り制度が設けられているものの、こうした制度がなくなってしまうと赤字になってしまい、農地に太陽光パネルを並べているが、このような形態で発電所を作ることは、特区に指定されている福島県以外では不可能である、原発1基で1時間に110万kWの発電ができる考えると、この施設の発電能力は300分の1に満たない、さらに原発と比べると雇用を生むことができないといった再エネに関する諸問題についても学ぶことができた（写真13）。

その後、避難指示が解除された旧避難指示区域と帰還困難区域に道路一本を隔てて分断されている富岡町夜の森地区を福島県庁の佐藤さんの案内で実際に歩いた（写真14）。帰還困難区域には、ところどころ8年間放置されている家屋が残るもの、避難指示が解除された旧避難指示区域は更地が続いている。福島県観光交流課（2019）のデータによると、富岡町の帰還率は約10%であり、戻らないことを決めている住民は約47%にのぼっている。その理由としては、避難先すでに新しい生活を始めているというものや、医療・介護施設が整備されていない、放射線量に対する不安、原発の廃炉作業に対する不安など様々あるが、いずれにせよ帰還することをあきらめざるを得なかった住民が多数いるのである。こうした中、さらに事情を複雑にしているのが賠償金の問題である。避難指示が解除された地域は、放射線量の値が「安全」とされる基準値内のため、住むことができ、賠償金は支払われない。しかしながら、前述したとおり様々な理由で多くの住民は帰還することをあきらめざるを得ない状態にある。その一方で、道路一本を挟んだ帰還困難区域の住民には賠償金が支払われる。「帰還することができない」という状況は同じにも関わらず、一方には賠償金が支払われ、他方には支払われない。こうしたお金にまつわる問題が、地域を分断していくのである。

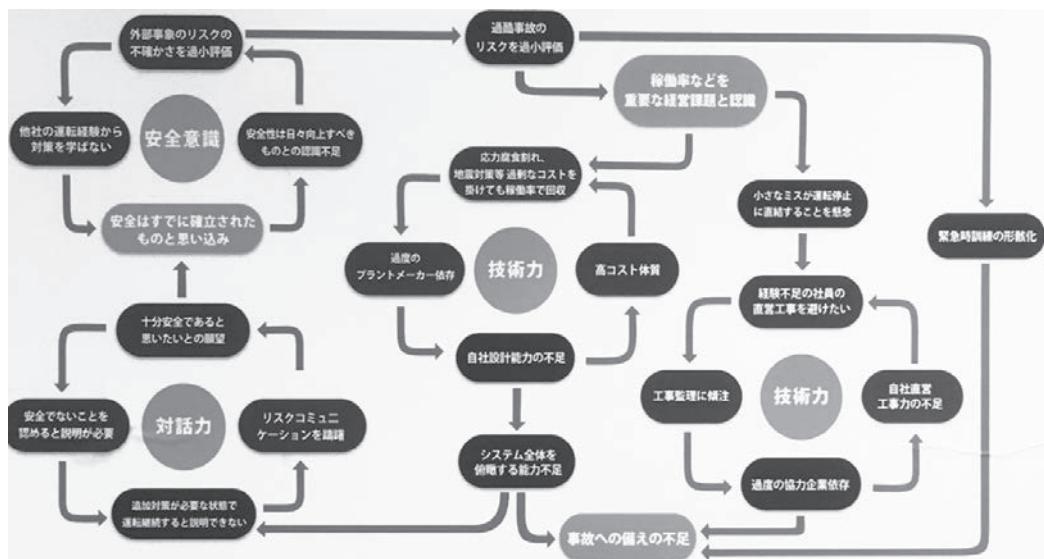
最後に東京電力の廃炉資料館で廃炉作業の進捗状況について学んだ（写真15）。2019年11月にオープンしたこの廃炉資料館は、第三者検証委員会の報告をもとにつくられており、踏み込んだ展示が行われている。例えば「反省と教訓」というコーナーにおいては、事故の背後要因の分析が行われ、そこに「負の連鎖」があったとまとめている（資料3）。しかしながら、これはあくまでも東電内部の問題を明らかにしたに過ぎない。結局のところ原発事故の責任主体はどこにあると考えればよいのだろうか。開沼（2012）は、責任主体を求ることについて、次のように述べている。

福島第一原発の事故が起こってみて（中略）すぐ予想していたことが始まった。国が悪い、東電が悪い、原発を推進してきた政治家や御用学者が悪い。「悪」探しと「悪」叩きが始まった。確かに「悪」を叩きのめした気になることで、一時的にすっきりするだろうが、当然、それで今ある問題が全て解決されるわけではない。むしろそうやって問題の原因を「悪」に帰し、「自分の外」に置いて、勝手に自分が免責された気になることで、原発は言うに及ばず、解決しなければと思いながらも解決できなかった日本の戦後社会が長く抱えてきた種々の問題が今まで放置されてきてしまったのではないか。

いま求められているのは、短絡的に作られた「敵」でも、薄っぺらい「希望」でもない。なぜ自分が、自分たちの生きる社会が、これまでその「悪」とされるものを生み出し温存してしまったのか、そしてこれからいかに自分の中の「悪」と向き合うのか、冷静に真摯に考えることに他ならない。「変わる変わる詐欺」を繰り返さないように。

東電を「悪」とするのは簡単である。確かに事業者として東電に責任はあるが、原子力発電というしくみによって生み出されるエネルギーを、疑うことなく享受していたのは間違いない「私たち」である。廃炉資料館を出て、国道6号線の帰還困難区域を北上すると、右の方に「私たち」がつくりあげたハイブリッドモンスターである1Fと、その事故の形跡が否応なく私たちに迫ってくる（写真16・17）。バリケードが設置された家屋、除染土が入ったフレコンバッグの山、「中間貯蔵施設」の看板、草がぼうぼうに生えた耕作地、崩れかけたままの店舗、そして鳴り出す線量計。帰還困難区域を抜けると、すぐ人々の生活のにおいを感じることができる。わずか20分ほどだが、生徒たちは、首都圏からわずか3時間ほどの位置に、言葉で形容しがたいこのような地域があることに目を見張る。仮設住宅をリニューアルした宿舎に到着し（写真18）、部屋に向かう途中で、ある生徒がポツリとつぶやいた。「ショックだった、本当に僕たちは何も知らなかったことがよく分かった。日本にこんなところがあるなんて…」

2日間で生徒たちが目にした風景、聞いた言葉、考えたことは膨大な量にのぼる。そして、それはどれも単純に整理することができるものではない。夕食後は、こうしたインプットした情報をまずはアウトプットさせることにした（写真19）。まず、班ごとに付箋紙を配り、とにかく思い浮かんだ言葉や文章をアウトプットさせた。その際、青色の付箋紙には、へえ～と思ったこと、勉強したいと思ったこと、黄色の付箋紙には面白いと思ったこと、赤色の付箋紙にはイラッとしたこと、もやつしていることを書くように指示した。次いでこれをカテゴリー別に整理しながら、班ごとに感じたことを共有する時間を作った。さらにそこ



資料3 東京電力廃炉資料館「反省と教訓」の展示

からどのような論点を導き出すことができるか、ディスカッションを行った。班ごとに話し合われたことをまとめると、以下の通りとなる。

A班

炭鉱において、命が軽く取り扱われていたのではないかという論点で議論した。その結果、人権が軽んじられていたという結論に達した。炭鉱での労働は、給与が非常に高く、安定した仕事であった。しかし、仕事としてはその村に生まれると、炭鉱で働く以外の選択肢はなく、法で禁止されていたにも関わらず、女性も働かされていた。炭鉱の後にこの地はエネルギー革命によって原発が建てられたが、原発も誘致せざるを得ない、原発で働くしか選択肢がない状況が作られた。このとき、お金の面では優遇されていたという点が炭鉱・原発の共通項としてあるのではないか。

B班

東電が行っていたプロパガンダについて、私たちがそれに騙されないようにするためにには、どのようにすればよいかという論点で議論した。これは、原発での対話や廃炉資料館での展示を見た際、自分たちだけが悪いのではないという保身を東電が行っていたように感じたからだ。その情報が本当に事実であるのか、しっかりと調べる、鵜呑みにしないということが大切である。しかしながら、実際にどうすればよいのか。世の中に関心を持つといつても、今フクシマで感じていることを身近な人に伝えることができるだろうか。また、東京に戻ってもこのような感覚を感じ続けることなど、できるのだろうか。

C班

1F、2Fを廃炉にするということが決まっただけで、結局最終的に放射性廃棄物はどこに置かれるのだろうか。問題を先延ばしにしているだけではないのか、という論点で議論した。1Fの廃炉は50年先と言われているが、そもそも可能なのか。また2Fも廃炉が決まっているが、将来の世代がやはり廃炉にしなくともよいのではないかという考えを持ち出したときに、私たちはどうすればよいのだろうか。2Fを見学したときに、「安全」という言葉をやたらと使われたが、原発事故は「想定外」のことがあつて起こっている。そもそも先週の台風被害にあらわされるように、「想定外」のことなどいつでも起こりうる。新規制基準を作ったとしても、またそれを上回る規模の災害が起こり、原発事故が起こってしまえば、日本はもう吹き飛んでしまう。結局放射性廃棄物に関しては、福島県内には置かないとは決まっていても、結局たらいまわしにしているだけ、問題を先送りにしているだけではないか。

D班

愛とは一体何かということに関して、議論した。もし自分が地元を奪われた人々だとすると、一生かけても許せないというのが率直な感想だ。しかし、東電職員も地元の人であり、少しずつ地元に受け入れられているという話を聞いたのが意外だった。そういう中で、困難に立ち向かいつつ、地元で生きていくという話からは、地元の人の愛を感じた。

これに対して、県庁職員の佐藤さんより、愛の反対の言葉は無関心である。今、世の中の人がフクシマを見る目線はどこにあるのだろう。「怖いなあ」という風評の目線なのか、それとも「福島もう大丈夫なんじゃねーの」という無関心の目線なのか。世の中の人は今フクシマに対して、果たして愛はあるのだろうかというコメントをいただいた。

発表の後、佐藤さんより生徒発表に対して総括コメントをいただいた（写真20）。アウトプット、カテゴリー分けの様子を見ていたが、最大で18のカテゴリー分けをした班があった。これまで30校近くの学校を見てきているが、ここまでたくさんのカテゴリー分けをした学校ははじめて見た。みんなに考えてほしいのは、福島県内とか県外とかといった問題ではなく、社会を形成する一員としての目線だ。

自分自身は、実際に3.11が起り、原発事故が起り、避難区域が同心円状に広がっていくのを目のあたりにした。その時まで、福島がまさかこんなことになるとはこれっぽっちも思っていなかった。そういう意味では、事故がなければみんなに会うこともなかっただし、一県職員として人生を終えるはずだった。

あの時に感じたのは「死ぬかな」ということだった。そして、そのあとに感じたことは「世の中は、大きく変わる」「確かに大きく変わる」という確信だった。先ほど、C班の議論の中に「先延ばし」という言葉が出てきた。その時は、今のような「先延ばし」にして何も変わらないというような社会は変わるとと思っていた。決めなければ、また同じような事故が起こって、東日本が吹っ飛んでしまう可能性もあったからだ。でも、今自分なりに何か変わったのだろうか、ということを問いかけている。もちろん変わった部分もあるが、物事を決められない、先延ばしにしているという点ではやはり変わっていないのではないか。中間貯蔵施設にしても廃炉にしても、ロードマップのようなキレイゴトが書かれている。しかし、なぜ何も変わらないのだろうということを、ぜひ一緒に考えたい。

もう一つ付け加えれば、今私たちはリアルを生きているということである。現代を生きているもの、リアルを生きているものがやるべきことがあるのではないだろうか。うまくいく、いかないは別として、何らかの行動を世の中の一員として起こしていく責任は、リアルを生きるものとしてあるのではないか。フクシマと同じ思いをみんなにはしてほしくない。どうすれば、東京の人たちのこの感覚は届くのだろう、最近はそういったことを感じている。

佐藤さんのコメントは、生徒たちにとって非常に大きな問題提起となった。誰もが原発事故が起こった際は、世の中が変わるとと思っていた。しかしながら、変わっていないことを「変わった」と信じ、フクシマを忘却することで無関心が広がっていった。そこには「愛」も流行語となつた「絆」もなかった。私たちは「何とかなっていない、何も解決していないぐちやぐちやのままのフクシマ」を「大丈夫なんじゃねーの」の一言で、知ったつもりで片づけようとする。そうした構造的暴力に加担しつつ、私たちはリアルを生きている。水俣病未認定運動に身を投じたが運動から離れ、「チッソは私だった」と自らの加害性に言及した緒方（2001）の言葉を借りれば「原発は私たちだった」のだ。そして、この問題は私たちが生きている間に解決することはないのである。

第4節 <3日目> フクシマをどのように考えればよいか、話し合う

最終日は、国の調査で8割以上の町民が「戻らない」「まだ判断がつかない」と答えている浪江町の実地調査から始まった。まちづくりなみえの菅野孝明さんの案内で、ところどころ家屋が残るもの、駅前から更地を見渡すことができる街で、現在どのような生活が営まれているか、伺いながら街の中を歩いた。この時に菅野さんが強調されていたのは、困っていますかとよく聞かれるが、困っているのではなく「課題先進地」として浪江町をポジティブに考えているということである。浪江町に関わらず、日本の地方はどこも少子高齢化と過疎に悩まされている。すべてを失ったからこそ、「課題先進地」としてどのように街を再興することができるか、そうした思いで活動されているということであった。

次に向かったのは、津波で壊滅的な被害を受けただけでなく、震災の翌日に原発事故による避難指示が出され、まだ助けを求めていた人々を救出することができず、結果的に見殺しにせざるをえなかつたという浪江町請戸地区である。後から分かったことだが、この地域の線量はそれほど高くなかった。同心円状に避難区域が広がつていくなか、SPEEDI（緊急時迅速放射能予測システム）をきちんと運用することができていれば、多くの人の命を救うことができた。かつて住宅が密集していたこの地は、現在一面の更地が広がっている。ぽつんと残る請戸小学校は、現在も津波が押し寄せた時のまま保存されており、3階の高さまで津波が押し寄せたことがわかる（写真21）。幸いにもこの小学校の生徒は、全員大平山とよばれる高台へ避難したため、犠牲者を出すことはなかった。

その大平山は、現在墓地として使われている。わずか数メートルの高台だが、この坂を駆けあがることができたかが、生死を分けることとなつた。後日書かれた生徒の感想には「大平山靈園で、わずか10秒であがくことができる坂をあがれたか、あがれなかつたかが生死をわけた」という話を聞いて、実際にそこにたつてみてぞつとした。また、請戸小学校などが津波の被害を受けたままの形で残っていて、中が本当にぐちやぐちやで言葉が出なかつた。

駅前に残っていた民家も、普通にお茶とかコップとかがそのまま机の上に残っていて、人の暮らしがその瞬間まであったのにそれが突然消えたんだということを強く感じた。今撮った写真や映像を見返しても、実際にその場に立って生で見た時と感覚が全然違う。実際に自分の目で見るということは大切だと思った」「自分の目で見て肌で感じてみないと分からないことだらけで、あんなに人気のない空気は、写真や文章からは想像の出来ない静けさだった。本当に行くことができてよかった」というように、「現場」で感じることの重要性に言及したもののが多かった。

さらに、請戸地区で起こった物語を紙芝居で伝える活動をされている浪江まち物語つたえ隊の岡洋子さんと八島妃彩さんの紙芝居を見せていただいた（写真 22）。紙芝居は請戸の昔話である『安波様』、消防団員の苦悩を描いた『浪江消防団物語 無念』、避難生活中の住民の故郷に帰りたいけど帰れないという葛藤を描いた『おふくろ』の3本である。生徒からの「どうして地元の昔話を入れたのか」という質問に対して、お二人からは「津波と原発事故がもたらしたものは、目に見える物理的な破壊だけではない。浪江町の町民はバラバラに避難し、多くの人がもう帰還しないことを選択しているために、地域に残っていた昔話や民話というものが失われてしまう可能性がある。これを残したかったという思いと、避難所をまわってこの紙芝居をしたときに、住民の懐かしいなあと故郷を思い出す顔が忘れられない」という2つのエピソードを紹介していただいた。また「原発さえなければという言葉が紙芝居に出てくるが、国や東京電力にどのような思いを持っているのか」という質問に対しては、「恨めしいという気持ちはある。浪江は原発立地町ではなく、地震と津波だけだったら、8年も浪江に戻ってくることができないということはなかったはずだ。今、もともと浪江に住んでいた友達は中通りや仙台、関東圏などなどバラバラに住んでいて会うことすらできない。隣近所だった方が避難先で亡くなると、葬式に行くのが一番大変だ」と生活者の視点ならではの実情を教えていただいた⁶。

原発事故が破壊したのは、こうした地域の文化やコミュニティであった。「紙芝居」という手法を用いてこれらを再興しようとされているお二人の話を受け、生徒たちは改めて原発事故によって壊されてしまったものの大きさに気づくこととなった。

午後は浪江町と同じく、原発立地村でなかったにもかかわらず、原発事故の影響を受けて全村避難が行われた飯館村に移動し、元原子力規制委員会委員長の田中俊一さんからお話を伺った（写真 23）。まず、原発事故の状況と放射能汚染という観点からは、事故に伴って放出されたセシウム 137 は 10^{16} ベクレルと算定されており、これをグラムに換算すると 310

⁶ なお、この様子はNHK福島放送局の取材を受け、2020年2月1日にNHK総合「ウイークエンド東北」の中で放送された。

グラムとなる⁷。最近の研究で、土壤からセシウムを分離することができるようになったという報道が大々的に行われたが、これだけ広大な空間にはらまかれたわずか310グラムのセシウムを回収することは実質的に不可能である。このように考えた際に、私たちはメディアの流す情報を正しく判断することができているのだろうか、という問題提起がなされた。また、極めて多数の震災関連死が出た原因として、避難指示と避難方法は適切であったか、放射線被ばくの健康被害についての評価や判断が適切であったか、放射線について国民の理解はあったのかという観点から判断すると、線量だけを見ると本来避難が必要なかった住民が多い。そうした人々が故郷を離れて避難を強いられたことによって震災関連死は起こってしまった。そのように考えると、震災関連死は国の誤った判断によって生じた犠牲者であるという話もされた。その他にも原発の新規制基準、廃炉、日本のエネルギー政策など様々な観点から科学者としてお話しいただき、生徒からは「トリチウム水の海洋放出に関して、科学的に考えた場合安全性に問題はないということはよくわかったが、地域住民がそれをどのように思うかはまた別問題ではないか」「デブリのかけらがようやく取り出せただけで、塊はまだ取り出せていない。スリーマイル島原発事故のデブリが30年たっても取り出せていないということを知り、廃炉は無理なのではないかと感じた。そうすると国・県・東電みんなでウソをついているといえるのではないか」といったコメントが出された。その後、3日間の行程をふりかえり、班ごとに論点を出したうえで以下の通り発表を行った（写真24）。

A班

震災関連死を防ぐためにはどうすればよいかという論点で議論した。そもそも震災関連死とは、避難中や避難後の体調不良、過労、うつによる死を指す言葉である。体調不良については、岡さんの話に合ったように毛布が足りない、食糧が足りないということがあった。さらに原発事故によって、こうした物資を届けることができなかつたという現状もある。どうすれば生活水準をあげることができたのだろうかということに関しては、時間内に話し合うことができなかつた。過労については、人が少ない中でガレキの撤去や除染作業を行わなければならなかつたという事実をふまえ、ボランティアの人たちの確保にどのような問題があつたか、より深く調べなければという意見になつた。うつに関しては、避難のために上京した人の中には、生活環境が合わない、孤独、いじめなどにあつといったことが起つた。また農業をしていた人の中には、仕事を再開しても作物を出荷することができない、そうした中、生きがいを失つてしまつくなつてしまうということが起つた。このように震災

⁷ 放射能（Bq）と半減期（T_{1/2}）は $A = \lambda \cdot N$ ($\lambda = 0.693/T_{1/2}$, N: ¹³⁷Cs 原子数) という関係で示すことができる。事故によって放出された ¹³⁷Cs の放射能量を 10^4 テラ Bq (= 10^{16} Bq), ¹³⁷Cs の半減期を 30 年 (= 9.46×10^9 秒) とすると、 $N = A / \lambda = A / (0.693/T_{1/2}) = 1.36 \times 10^{24}$ ¹³⁷Cs の質量 = 137g (1mol) Nav= 0.6022×10^{24} となり、310g セシウムが放出されたと算定することができる。

関連死にいたる背景は人それぞれ異なる。しかし、国民の正しい理解を深めることができれば、こうしたことは少しでも防げたのではないか。

現在、生活物資は足りているし、情報も検索すれば正しいものを知ることができる。風評被害を防ぐ工夫もたくさん行われている。しかしながら、現在進行形で震災関連死が続いているという事実を私たちは考えなければならない。

B班

福島の人たちの風評被害について議論した。私たちは福島にきて分かったことがある。実際にこうやって福島にいるが、安全だし、食べ物もおいしかった。だから、まず福島に来て現実をみてもらうことが必要である。そういうツアーも数多く行われているようだが、まだまだ原発事故がもたらした複雑な「フクシマ」の現状は知らないし、来ないとわからない。「フクシマ」を「福島」としてつたえるのは、逆にプロパガンダになってしまうおそれもある。どのように福島を「フクシマ」として伝えることができるのか、考えていかなければならない。

C班

メディアとは何か、メディアの情報を受け取った私たちは何ができるのかという点について議論した。そもそもメディアとは、事実と国民をつなげる媒体である。無限にある事実を優先順位の高いものから報道することがメディアの役割として求められている。しかしメディアを作っているものは結局人間であり、人間は金と権力に弱い。本来伝わるべき情報が、国民に伝えられない、もしくはねじ曲がって伝わることも多い。そもそもメディアが伝えようとしても国民が無関心だという現状がある。私たちがどのように関心を持つことができるかということが、試されている。

こうした考えにいたったのは、東京電力での対話と廃炉資料館の印象である。東電は安全策をとっていると主張するが、例えば凍土壁に関しても、いったん雨が降れば、汚染水はどんどん海に流されて行ってしまうという現状があり、そうした現状は展示されていない。そもそもそうした事実があるということを知らなければ、私たちは情報が偏っていたとしてもそれを受け入れてしまい、正しく判断できない可能性がある。そもそも私たちは、何を知ることができるのかという視点が重要である。

D班

被災者目線で正確な知識を知ることは、どのようにすれば可能かという論点で議論した。知識とは、他人に騙されないためのものであり、自分の責任で判断すべきものである。しかし、被災者自身がどこをゴールにすればよいか、定めることができていないという現状があ

る。だからこそ、どうやってどの程度まで知識を得ればいいのかということに関して、被災者自身がわかっていないのではないか。そうした中、一番情報を持っているのはメディアである。そもそもメディアからしか情報をもらうことができないということ自体がおかしいのではないかという意見や、田中さんがおっしゃっていたように国民の意識をレベルアップし、メディアセレクトをすべきという意見もわかるが、結局レベルアップとは何か、メディアを通さずに情報を得ることなどできるのだろうか、というところで時間切れとなった。

総括として最後にメディアとは「媒体」という意味である。生徒たちが自分自身の目で様々なものを見て、様々な立場の方からの言葉を聞いて、自分なりに考えたという経験は、なかなか得難いものであり、それを家族や友人といった最も身近な人にどのように媒介し、伝えることができるか、ということがメディアとしてのあなた自身の役割である。あなた自身のあり方が問われているということを筆者から伝え、フクシマの実地調査を終えることとなった。後日生徒からは、現地でもっとたくさん議論したかったという声が多く聞かれた。

フクシマとオキナワに共通してある根底的問題は、構造的な問題である。生徒たちは東京に帰ってから、そしてオキナワでもこうした構造について、議論し続けることとなった。

第4章 オキナワ実地調査に向けて

第1節 新崎盛暉『日本にとって沖縄とは何か』の輪読

この節では、新崎盛暉『日本にとって沖縄とは何か』をまとめながら、フクシマから帰ってきた生徒たちが、輪読を通してどのような論点やコメントを出したか、紹介する。

第1章「平和国家日本と軍事要塞沖縄」では、沖縄戦ができるだけ「本土決戦」の時間をかせぎ、あわよくば「国体維持」を条件とする和平交渉への「捨石作戦」として行われ、その後米軍単独の軍事占領が続けられた過程の詳細について書かれている。1947年に天皇は側近の寺崎英成を通じて「アメリカが日本に主権を残し租借する形式で、25年ないし50年、あるいはそれ以上、沖縄を軍事支配することは、アメリカの利益になるのみならず日本の利益にもなる」というメッセージをGHQに伝える。この「天皇メッセージ」は、明らかに天皇の私的利害に基づくものであった。なぜなら日本国憲法は施行され、象徴天皇制の地位は確立していたが、極東委員会の中には、なおGHQの独走に対する不満がくすぶっており、そのことを不安に感じる天皇は、天皇制の擁護者であるマッカーサーの機嫌を取る必要があったからである。その後も天皇は米軍駐留、安保条約の問題についてもその政治的意思をアメリカ側に伝えていたことが近年明らかになっている。本来「内閣の助言と承認」によって限られた国事行為しか行えないはずの天皇の政治的発言は、主権在民を旨とする憲法上において重大な問題であったといえよう。

こうした中、1952年のサンフランシスコ平和条約ならびに日米安保条約の発効によって沖縄は切り捨てられた。この時点で日本全土には、沖縄の約8倍の米軍基地が存在しており、砂川闘争に代表されるように全国各地で反米反基地闘争が続発していた。そして基地は「忘れられた島」である沖縄に押しつけられるようになっていく。米軍当局は武装兵を動員し、「銃剣とブルドーザー」によって暴力的に土地接収を行った。これに対して、沖縄の中では一括払い反対、適正補償、損害賠償、新規接収反対という「土地を守る四原則」をスローガンとする「島ぐるみ闘争」が爆発した。

この章では、その後島ぐるみ闘争が「さまざまな糸余曲折を経て、結局、一括払いの撤回と、軍用地料の引き上げによって終止符を打つことになるのある」という文で締めくくられている。しかし、この「糸余曲折」が現在の沖縄県内における基地問題と大きく関わっていることから、筆者による補足説明を行った。この島ぐるみ闘争が切り崩されるきっかけとなつたのは、現在基地建設が行われている辺野古集落が、条件闘争を重ねたうえで、基地を受け入れる決断を行ったことにある。当時の新聞取材に対し、辺野古集落を管轄していた久志村長は「基地を持つことによって、村の経済が良くなるということで地主が傾いた。特に経済的に不遇のある久志村にとっては、基地設定によって経済転換もでき、また村有財産（山林）の15万坪もこれまで何らの収入とならなかつたが、賃貸料が入ることとなり、つまり無から有を生ずるということになるので、村財政も楽になる。今度の問題は、どうすれば村民が幸福になるかを考えた場合の結論である」と述べている。

辺野古の人々は、戦前辺野古の生業であった林業が衰退し、中南部で行われていた軍作業への出稼ぎが主な現金収入となっていたこと、現普天間基地が住民の反対にも関わらず強制接収されたことをふまえ、価値を失いかけていた杣山を軍用地という「資源」として再び立ち上がらせるために条件交渉を行つた。このときに重要なのは、辺野古がもろ手を挙げて基地を「誘致」したわけではないということである。「地主が傾いた」という言葉にあるように、当初辺野古は基地建設に反対していた。しかしながら「経済的に不遇のある久志村」にとって、強制接収を避け、生活を成り立たせるためには「条件交渉」以外の選択肢はなかったのである。これらは、本島中部で行われていた「島ぐるみ闘争」と大きく背景が異なる点であるといえよう。こうして辺野古は基地を受け入れ、キャンプ・シュワブが建設されることとなつたのである⁸。

⁸ 辺野古が現存する基地を受け入れたという歴史は、民衆が「島ぐるみ」で抵抗を行つたとする沖縄戦後史の汚点としてタブー視されており、ほとんど研究がおこなわれてこなかつた。こうした中、筆者はこの受け入れ過程に関して、当時の有力者への聞き取りをはじめとした調査を2005年から現在にいたるまで行つている（川北2011）。また、この受け入れに関しては、NHKが2019年9月に放送した「ETV特集：辺野古 基地に翻弄された戦後」において、基地を受け入れた際に放送された音声テープを放送し、この基地建設が「誘致」ではなく、受け入れざるを得ないものとして行われたことを明らかにしている。

生徒からは「本来日本が解決しなければならなかつた基地問題を沖縄に押しつけたということがよくわかつた」「島ぐるみ闘争の時に辺野古が基地を受け入れたことを知り驚いた。貧しかつたから基地を受け入れるという状況は、原発を受け入れた福島と似てると思った」といった日本が弱者に強いている構造的差別関係に着目したコメントが多くみられた。

第2章「60年安保から沖縄返還へ」では、1960年の安保改定によって定められた共同防衛地域が「日本国の施政の下にある領域」となり、沖縄が含まれなかつたこと、「日本の平和と安全」のためばかりでなく、「極東における国際の平和及び安全の維持に寄与するため」に米軍が基地を使用することを許されることとなつたこと、これを名目に米軍が勝手な行動をして日本が戦争に巻き込まれることを避けるため、たとえば核持ち込みなどの装備における重要な変更や日本からの戦闘行動などを事前に協議対象とする交換公文が取り交わされこととなつたことなどがまとめられている。安保適用地域の外に置かれた沖縄は、事前協議の対象とされなかつたため、ベトナム戦争時に米軍は、沖縄からベトナムに自由に軍事行動をとることができたのである。このように沖縄は、安保体制を外から強化する役割を担わされた。

こうした中、沖縄では日本国憲法を享受し、「核抜き・本土並み」の基地負担を求める祖国復帰運動が盛り上がることとなる。こうした中、佐藤栄作は「有事の際の沖縄への核持ち込み」を認める密約を結び、1972年に沖縄は祖国に復帰することとなつた。この時、本土の基地は約3分の1に減り、国土地面積の0.6%の沖縄に、在日米軍基地（専用施設）の約75%が集中するという状況が生み出された。復帰式典で、屋良朝苗知事は「復帰の内容をみると、必ずしも私どもの切なる願望が入れられたとはいえない（中略）沖縄がその歴史上、常に手段として利用してきたことを排除して、希望の持てる新しい県づくりに全力を挙げたい」と述べている。

生徒からは「佐藤さんは沖縄を守るふりをして、実質自分の支持率のことしか考えてなかつたのではないか」「今まで沖縄をないがしろにしてきた日本に復帰するのではなく、沖縄という独立国として主権を回復する方法は考えられなかつたのだろうか」といったコメントが出された。

第3章「1995年の民衆蜂起」では、祖国復帰によって軍用地の借り受けを日本政府が行うようになり、米軍に提供することとなつた結果、軍用地をめぐる様々な問題が生じたことが明らかにされている。復帰後政府は、使用料を平均6倍に引き上げ、さらに契約奨励金を上積みして、契約促進をはかった。この結果、基地のフェンス1枚を隔てて植えられたサトウキビの買い上げ価格が、同じ面積の軍用地使用料の7割にしか相当しないというような事例が生じることとなる。つまり農民の労働は、マイナスの価値しか持たないという転倒した現象があらわれるようにになつたのである。こうした軍用地料という補償を受け、「島ぐるみ闘争」を牽引していた土地連合会は、自民党の支持基盤となつた。一方で、これに対

して反戦地主会が結成されたことも紹介されている。また新崎は、沖縄東海岸を埋め立て石油備蓄基地（CTS）を建設しようとする運動に反対する「金武湾を守る会」の活動を紹介し「金武湾闘争は、地域住民の土地を守る運動として始まり、反公害運動としての要素を加え、やがて「豊かさとは何か」を問う地点に達し、その後の沖縄の諸運動、さらには沖縄社会に大きな影響を及ぼすこととなった」と評価している。

「反戦地主」の存在や「金武湾を守る会」の運動は、確かに「沖縄の良心」に訴えかける運動として高く評価することができる。しかしながら、本書には書かれていないが、復帰後県知事選においては、太田昌秀が選出されるまで20年近く沖縄県は保守県政であったという事実も見過ごすことはできない。生徒には、復帰後本土の大手ゼネコンによって沖縄の観光開発が次々に行われ、埋め立てが加速化していったこと、そうした中で「沖縄イメージ」が創られていった背景についても補足説明を行った。

こうした潮流を大きく変えることとなったのが、1995年におこった少女暴行事件である。米軍が被疑者の身柄引き渡しを拒んだことをふまえ、知事は日米地位協定の見直しを求めて上京した。この事件が起こるまで、沖縄は米兵犯罪や基地に関する事件・事故のたびごとに日米当局に対して抗議と再発防止を訴えており、その回数は125回にのぼっていた。しかしながら地位協定の改定を求める知事に対し、当時の河野洋平外相は「いささか議論が走りすぎているのではないか」というきわめて冷淡な対応を行った。

これに対して知事が行ったのが代理署名拒否という手法である。10月に行われた「米軍人による少女暴行事件を糾弾し、日米地位協定の見直しを要求する沖縄県民総決起集会」には、85,000人の人々が集まった。これに驚いた政府は「沖縄に関する日米行動委員会（SACO）」を設置し、橋本首相とモンデール駐日米大使は「普天間基地の全面返還で合意した」とする共同記者会見を行った。しかしながらその3日後に発表された中間報告は「今後5～7年以内に、十分な代替施設が完成した後、普天間基地を返還する。施設の移設を通じて、同飛行場の極めて重要な軍事上の機能及び能力は維持される」とするものであった。つまりこれは「移設条件付き返還」であり、老朽化した施設を更新するための「基地の整理統合・集約化」であった。さらに1997年に入ると、日米両政府は移設先をキャンプ・シュワブ（名護市辺野古）沖とした。これに対し、当初名護市長も市議会も地域ぐるみで猛反発した。しかし、市長は代替施設には原則反対しながらも、事前調査容認に態度を変えていった。

これに対して、住民たちは「大切なことはみんなで決めよう」のスローガンのもと住民投票条例の請求に動き出すこととなる。この頃から市長や市議会与党は、海上基地を容認することと引き替えに北部地域振興策を引き出すという方向に踏み切っており、条例制定に難色を示していた。しかしながら署名が市長選挙での得票数を上回ったことを受け「賛成」「環境対策や経済効果が期待できるので賛成」「環境対策や経済効果が期待できないので反対」「反

対」という四択方式で、住民投票が行われることになった。基地に賛成か反対かではなく、現状維持か振興策かの選択にすり替えられて行われた住民投票は、防衛施設局による戸別訪問や官房機密費を用いた買収にめげず、51.63%の反対票により基地を拒否するという明確な民意を示した。新崎は名護市民投票を「地域住民の自己決定権の獲得をめざし、生活（豊かさ）の内実を問い合わせ、人間としての誇りを示した」と高く評価している。

こうした中、名護市長の比嘉鉄也は上京し、橋本首相と会談したうえで基地を受け入れたうえで辞任することを表明した。これを受け、基地問題を前面に押し出した革新系の玉木義和と基地問題を争点から外した保守系、名護市元助役の岸本建男による市長選挙が行われた。岸本は「海上ヘリ基地は知事の判断に従う」と宣言し、当選した。この後に行われた沖縄県知事選挙では、専用施設としての基地ではなく、15年間の使用期限付き軍民共用空港をつくるという公約を掲げた稻嶺恵一が太田昌秀に大差をつけて当選した。

岸本は翌年「基地の負担は日本国民が等しく引き受けるべきだが、どの県もそれをなす意思はなく、またそのための国民的合意も形成されていないので、これ以上の軍事施設の機能強化は容認できない」という多くの市民の意思があることも承知しているが、受け入れを容認せざるを得ない」として、①安全性の確保②自然環境への配慮③既存の米軍施設等の改善④日米地位協定の改善及び受け入れ施設の15年使用期限⑤基地使用協定締結⑥基地の整理縮小⑦北部振興策の確実な継続という条件を掲げ、「このような前提が確実に実施されるための具体的方針が明らかにされなければ、私は移設容認を撤回する」と述べた。

SACO合意をふまえると、これらの条件がアメリカに受け入れられるはずはなかった。政府がこの条件に対して対米交渉をした形跡はない。したがってこれらの条件を守りつつ、基地を建設することは事実上不可能だったのである。市民の座り込みによって基地建設に伴うボーリング調査すら着手できない状況をふまえ、2005年に日米安保協議委員会（2+2）は、一方的に軍民共用空港案を廃案にし、普天間飛行場にはない燃料桟橋、護岸、断崖搭載エリアを持つ「沿岸案」で合意する。こうして「撤去可能な海上ヘリ基地」から「大浦湾から辺野古沿岸を埋め立て、V字型に2本の滑走路を持ち、強襲揚陸艦も接岸可能な沿岸案」へ計画は大きく膨らんでいったのである。

しかしながら、そもそも米軍基地は沖縄になければならないわけではない。例えば防衛大臣をつとめ、現在は軍事専門家である森本敏は「軍事的には沖縄でなくてもよいが、政治的に考えると、沖縄がつまり最適の地域である」と述べている。同じく防衛大臣をつとめた中谷元も「理解してもらえる自治体があれば、県外にも移転できるが、なかなか「米軍反対」というところが多くて移転は進まない。分散しようと思えば九州でも分散できる」と答えている。

つまり軍事的観点からは、米軍基地が沖縄にある必要は全くなく、政治問題化することを避けるために、米軍基地は沖縄に存在し続けているのである。これに対して生徒からは「沖

縄がこのような状態になっているのに、どうして本土のわたしたちはなにも伝わらない構造になっているのか」「米軍基地は沖縄じゃなきゃいけない理由があると思ってたし、思われていた。福島の住民に対しては(筆者注:原発のことに対する)プロパガンダがあったが、沖縄のことでは、本土の方にプロパガンダのようなものが行われているのではないか」といったコメントが見られた。

第4章「「オール沖縄」の結成」では、文科省が集団自決の記述において日本軍による強制の記述を修正・削除した「教科書検定問題」を機に、沖縄県内において保守革新を超えた運動が盛りあがったことが明らかにされている。新崎は、少女暴行事件の際に行われた県民大会を上回る11万人が会場に足を運んだ理由について「世代を超えた歴史的体験の共有」にあるとしたうえで、次のように分析している。

沖縄戦の直接体験者の激減は（中略）沖縄社会全体についていえることであった。とくに、報道機関や教育現場には、直接の戦争体験者は、もはや一人もいない。にもかかわらず、教科書の記述が、修正・削除されようとしていることの意味を、もっとも敏感にとらえたのは、報道機関や教育現場にいる直接的な戦争体験を持たない世代であった。なぜいま教科書の記述がかえられようとしているのか。それは、今現在の政治的動向と固く結びついているはずである。教科書検定意見に直ちに反応できたか否かは、直接的戦争体験者の数の問題ではなく、現実感覚の差であった。歴史的体験は、現実の課題を通して、はじめて社会全体に共有化される。それが戦争体験の風化現象を押し戻す。

生徒に実地調査を通して感じてほしかったのは、輪読では感じることのできない「現実感覚」であった。沖縄戦と基地問題は切り離すことができない。そしてその根底には、「軍」という存在が孕む本質的な問題がある。生徒からは「沖縄の問題だけではないと頭ではわかっているが、東京に住んでいると正直どこかで関係ないとてしまい実感がわからなかった。沖縄で色々なことを学ぶことで意識は変わるのだろうか」というコメントが見られた。

第5章「沖縄、そして日本は何処へ」では、2007年に起こった政権交代を機に、普天間の移転先を「国外、最低でも県外」としていた民主党政権が公約を実現せぬまま自民党政権に戻り、基地建設が行われている現在に至るまでの過程について分析が行われている。民主党政権の挫折に関して、新崎は①オバマ米民主党政権への過剰な期待②外務・防衛官僚の対米追随的態度③本土マスメディアの思考停止を掲げている。こうして鳩山政権は、普天間基地問題を解決できなかった責任をとって退陣し、民主党政権は基地建設の手続きを進めいくこととなる。こうした民主党政権の「裏切り」に対して、沖縄の世論はこれを激しく糾弾した。また普天間基地へオスプレイの強硬配備が行われると、これに抗議する県民大会が保

革を超えて行われた。2013年にオスプレイ配備撤回、普天間基地の早期閉鎖・返還、辺野古新基地建設反対の「建白書」を持ち上京した代表団が銀座で行ったパレードに対して、日の丸や星条旗を掲げた在特会などの右翼団体が、「売国奴」「日本から出ていけ」といった罵声を浴びせた。これにやるせない思いを感じ、のちに「オール沖縄」を掲げて沖縄県知事となったのが前知事の翁長雄志である。

しかし当時の沖縄県知事の仲井間弘多は、沖縄振興予算の数百億円の増額と5年以内の普天間基地の運用停止という約束を安倍首相と交わし、辺野古埋め立てを承認する。こうして安倍政権はボーリング調査に着手するが、同年行われた名護市長選挙では、辺野古に基地を作らせないことを公約に掲げる稻嶺進が、沖縄県知事選挙では、同じく辺野古への基地建設に反対する翁長雄志が当選する。しかし政府は「辺野古移設は肅々と進める」とし、上京した翁長との面会を拒否した。その後も政府は「辺野古移設が唯一の解決策」と述べている。

本書は2016年に出版されたため、政府と県の対立についてはここまでしか記述されていないが、現在に至るまで状況は全く変わっていない。2019年には辺野古への埋め立ての賛否を問う県民投票が行われ、約72%の反対があったにもかかわらず、同年12月14日、辺野古への土砂投入は強行された。生徒からは「沖縄がこれだけ声を上げても政府は無視し続け、金で解決しようとしていることを強く感じた。現地の人だけではなくて、本土からも声を上げなければならないと思った。本土にいる自分たちが何ができるのか考えることが大切だと思った」というコメントが見られた。

第5章 オキナワ実地調査

第1節 ゆんたくを通して、肌感覚でオキナワを感じる

『近代日本150年：科学技術総力戦体制の破綻』の輪読とフクシマ実地調査、さらに『日本にとって沖縄とは何か』の輪読とディスカッションを通して、共通して出てきたキーワードは「構造的差別」である。東京でもフクシマでも「こうした構造的差別について、私たちは知らなければならない、考えなければいけない」という結論が出ることが多々あり、議論が教育論やメディア論にいたることもあった。こうした中、私たちはどのような視点で、事実をとらえなければならないのだろうか。水俣病に寄り添い、東大において「万年助手」に据え置かれた科学者の宇井純は、環境倫理学者の鬼頭秀一との対談で、中立性とは何かについて次のように述べている。

鬼頭：宇井さんは、自主講座「公害原論」で、「公害に第三者はない」と言われました。そして三年前に埼玉大学で行われた講演で、「公平性を捨てた」と言われました。私は、このような一見逆説的に見える言説がとても重要な本質を含んでいるように思っており、

注目しています。これは、第三者とか、中立的な立場にいる人が一部しか見ていない、見えていないということですね。

宇井：ぼくが「公平性を捨てた」という議論をしたのは、どちらかというとマスメディア向けだったんですね。マスコミが当事者、つまり加害者と被害者の両方の言い分を聞かなければと言うので、両方の言い分を聞いたって絶対に本当のことは分かりはしないですよ、ということをマスコミに言っていた。加害者からは全体像は出てこないのだから、被害者だけが全体像を話したって、マスコミはどうせ中間をとってこれが真実ですと報道するに決まっている。でも、そんなものは現実とは何の関係もない。それでは公平性はどうするのですか、と言うから、「公平性」なんていうものは初めからないのだから初めから頼りにするなと言ったんです。第三者がいないというのは、実際に両方の言い分を聞いてみればよく分かるはずです。それなのにまるで第三者がいるかのようにメディアで発表すること自体が間違っているんじゃないかな、そういうことを言いました。はじめマスコミの人たちはかなり衝撃的に受け止めていたようです。

鬼頭：そうでしょうね。学者も同じなんですが、自分たちは中立的な立場にあるということで特権的な立場にあるとメディアの人たちは思いたいのだと思います。ところがそういうものがないといわれると、どこに拠って立っていいのか分からなくなってしまう。

宇井：だからそこは「被害」から出発するしかないじゃないか、ということを言っていたわけです。

鬼頭：それはとても「深い」ですね。加害者は、被害を引き起こしていて受けていない側ですから、被害を、外からというか、上からというか、表面的に理解できる範囲でしか考えません。しかし、被害者の患者さんは被害を総体として受けているから、否応なく総体として関わらざるを得ないものとして受け止めています。その上で、行政もメディアも、学者も、その両者の間で第三者として中立性を保とうとしたとき、そう思えば思うほど、外から、あるいは上からみることで中立性を確保しようとします。でも、それは結局、加害者と変わらない見方しかできない。

宇井：そういう言い方を行政にしたわけです。行政にとってもかなり衝撃的であったみたいです。

鬼頭：行政は「公平性」がなによりも重要だという認識がある。だから患者の救済といったときも必ず公平性を根拠にしていろんなことを言う。でも結局、「公平性」を重視するということは構造的に加害者の立場に立つということで、そのことに自覚的でなければならぬ。その辺の論理構造は非常に重要です。ところが、一般的には、患者さんを目の前にしても、患者さんの生活をきちんと見ることもなく、机の上だけで加害者と被害者を並べてしまう。机の上では中間があるように思えるんですね。ところが現場に行くと、そん

なものではないと分かる。だから、「現場」から出発すること、それが問題を本質で捉えることの原点になるわけですね。

そもそも私たちが生きる社会で起こっている諸問題を考える際、「第三者」など存在しない。こうした中で「中立性」や「客觀性」を確保しようとする行為自体が特權的なものであり、こうした見方は結局のところ加害者と変わらない見方しかできないという宇井の視座は、水俣病の現場で育まれた。東京での輪読、あるいはフクシマでの実地調査を通して、人類学徒であった筆者が生徒に伝えるべきだと感じたのは、こうした「客觀的に語ることの危険性について」であった。こうした問題提起を事前に行なったうえで、オキナワでの実地調査では「より低い視点」から物事を見ることができるよう、班ごとに20代前半のファシリテーターをつけることとした。そのうえで、構造的差別に対して抗うことができない要因や住民の苦悩について、議論する時間を長めにとることにした。

もう一つ重要なのは、こうした調査を行う際に「そもそも被害者は語ることができるのか」「その語りえぬ想いを私たちはどのようにとらえればよいのか」という視点である。原発事故や沖縄戦、基地問題などについて語ろうとするとき、人々は言語化することのできない想いの前で戸惑い、自らを傷つけることを避けるために口をつぐむ。物理的にわずかな時間しかないことを勘案して、筆者は「語ることができる」人をあらかじめ選定し、綿密に打ち合わせをしたうえで、生徒の前で話をしていくこととなる。しかし、その背後には「語りえない」想いを抱えた人が大勢いることを想像しなければならない。こうした想いを筆者なりに伝えたうえで、オキナワ実地調査は始まった（資料5）。

第2節 <1日目> 軍官民共生共死を体験する

那覇空港に到着した後は、空港近くの奥武山公園で2日間お世話になるファシリテーターの狩俣日姫さん（沖縄県庁勤務・宜野湾市出身）、立石巧海さん（琉球大学3年・徳島県出身）、安里拓也さん（沖縄国際大学4年・伊江村出身）、阿山咲春さん（琉球大学2年・京都府出身）と合流し、アイスブレイクを行った。その後、アブチラガマへ向かうバスでは、自己紹介をしつつ、沖縄を語ることの難しさについて、ファシリテーターたちが対話を行った。沖縄戦や基地問題を語るうえで、ファシリテーターたちが立ちすくむのは「あなたたち若者は分かっていない」「ナイチャー（本土の人）にはわからないでしょ」という声だという。こうした世代間や県内・県外出身という区別に立ちすくむ感覚は、行程を進めていくにつれ、生徒たちも感じるようになっていく。

アブチラガマは、日本軍・沖縄守備軍・住民の軍官民が共生共死した場所となる。軍・官・民がどのように「科学」を創ることによって総力戦体制が可能となったのかということを輪

読した私たちにとって、興味深い場所である。ガマの中では、日本軍の兵士として中国戦線で戦ったのち、沖縄に派遣された日本兵の日比野勝廣さんの証言に基づいてお話をうかがつた（写真25）。なおガマの中は真っ暗であり、撮影・録音等は一切禁止されている。そのため、以下日比野さんの証言より抜粋しつつ、当時の状況を考察する。

私の横には、末長君（九州出身）、吉田君（東京都出身）、吉田君（長野県出身）と三人寝ていた。痛みにうなされると東京の吉田君が、「静かにしろ」と叱りとばし私をなぐつた。体には水分一滴なく、骨と皮だけで死人同様であるにもかかわらず、意識だけ明確で、すぐ下を地下水が流れているのか、水の音が聞えた。それが、頭にこびりついて、「あの水さえ飲めば、死んでも悔なし」と、一途に思いつめていた。動けぬ体では全く罪な話で、左手で耳をふさいでも右耳から水の音は伝わり、「水、水」と、水のとりこになって気も狂わんばかりであった。今にして思えば、その一念が「生」を保つ支えとなっていたようである。全てを水に集中したことが、結果的に、死神を寄せつけなかったのだろう。こんな時、大声で怒鳴り散らす者はすべて狂っている者で、この世の声とは思えぬうめき声も聞える。声の出る者は、まだ元気のあるほうで、ひっそりといつの間にやら死んでしまう者も多数出た。まっ暗なガマに時々「大こうもり」らしい羽ばたきが静けさを破るほかは、「動」のない「死」の世界が幾日も続いた。

仰向けに寝ている背の下にムズムズしたものを感じ、それらが、やがて首筋、お尻の下にも感じられる。手さぐりでつまんだら、それは、大きな「うじ」で群をなしていた。どこからきたものか、あたりを見まわした時、ふと隣りの吉田君（東京）が、いつの間にか死んでいた。そして、すでに腐り始め、そこからはい出していることが分かる。死臭鼻をつき吐き気さえ感じていたが、まさか一番元気だったこの人が死んでいるとは意外だった。そういえば自分をなぐらなくなっていた。

アブチラガマは、元々糸数集落の住民が避難するための指定避難壕だった。しかし、南部撤退してきた日本軍は陣地壕とするべく住民を追い出した。さらに戦場が南下すると、このガマは陸軍病院の分室となったが、日比野さんはその病院で見捨てられた日本兵の一人だった。真っ暗闇の中、今もただ水が流れる音だけが響きわたる。そうした中で、証言を聞くと当時の状況が立ち上がりてくる。そこには強者も弱者も理論もない。とにかく生きたい、生きて太陽の光を浴びて死にたいと考えた日比野さんは、その後奇蹟的に救出された。救出される際、住民たちは一番危険なガマの入口に大勢いたという。中には方言を話したとスパイ容疑で射殺された住民もいた。救出されたときのことについて、日比野さんは次のように綴っている。

科学万能の時代に、その粋をもってしても屈せず、破壊を敵として拒んだ万古不变のあのガマ、自然の威厳。この威厳は、いつまでも続くだろう。偉大なる自然是、「弱い人間」の味方として戦いから守ってくれた。半月以上、毎日爆雷を投げ込み、穴の口を完封したガマに、よもや重傷の身を捨てられ、半年以上も生き延びていたなぞとは、自然の偉大な働きとしてしか判断のつきかねることである。

幸い、私は奇跡的に生還でき、苦しかった当時を想い出して綴ることが許されているが、幾多の友の中には、私以上に苦しみ、ただ一人見知らぬ土地で、寂しく息絶えていった。戦は、勝っても負けても悲惨である。死者に声があれば、私と同じことを叫び続けるであろう。「生」から見離され、しかし、生命のある限り生きてゆかねばならなかつた人間。「生きる」苦しみは、とうてい言葉では表わせるものではない。私のつたない綴りの中にある事実は、すべて遠く過ぎ去つた悲劇であるが、今もって、沖縄のガマの奥深く、永久に発見されるすべもなく眠つてゐる「みたま」の幾多あることを思うと「日本国民すべての人が、もういちど悲惨な戦争を想起してほしい」みたまに代つて、私は叫ばずにはおられない。

ガマを出ると、青々とした緑が目に飛び込んでくる。そして、再び地上に戻つてくることができたことに安堵する。しかし本土に戻つた日比野さんを待つてゐるのは「なぜお前だけが生き残つたのだ」という声だった。こうして日比野さんは「自分だけが生き残つてしまつた」苦しみを何十年間も経験することとなる。

ガマでの経験は、生徒にとってはショックだったようだ。バスの中では、こうした感情に訴えかける平和教育の是非について、ファシリテーター同士の対話がはじつた。「戦争はしてはいけない」「平和は大切」といった空虚な言葉のみが生み出されているのではないか、といったものや、感情に訴えかける平和教育は効果があるのだろうか、といった問題提起が行われた⁹。生徒からは「平和学習って何なんだろうと思った。理性や理屈で「戦争はダメなんだ」と言うより「嫌だから嫌だ」と感情で動くことも大切」という言葉が印象に残つた」というコメントが見られた。

そうするうちに、バスはひめゆり平和祈念資料館につく。74年前、アブチラガマからひめゆり学徒たちは、この第三外科壕まで撤退してきた。こうした中、そもそも「ひめゆり学

⁹「戦争の被害の悲惨さを聽かせる教育の限界」や「平和教育のマンネリ化」に対しては、日本平和学会（2019）、下嶋（2015）をはじめとした多くの論考がある。こうした言説に対し山口（2018）は、こうした問題が「沖縄戦70年」という時間が生み出した問題ではなく、『子どもが主人公の授業をどう作り上げるのか』という問題であり、「学ぶ主体である子どもに疑問や思考の自由が保障されていること、つまり子ども自身の力で平和とは何か、なぜ平和が大事かを考える場が授業に作り出されていること」が平和教育において重要であると指摘している。こうした指摘をふまえたうえで、本実地調査におけるワークショップは、生徒自身が主体的に平和について考えることができるよう工夫した。

徒」とはいったいどのような人たちなのだろうか。そのためには「ひめゆり学徒」という抽象的な視点からではなく、個人の視点から彼女たちが「科学技術総力戦体制」に巻き込まれていったか学ぶ必要がある。こうした観点から入館前に「資料館で誰か一人ひめゆり学徒の友達を作ろう」「その人になりきって、戦争とは何だったのか、考えよう」という指示を行った（写真 26）。生徒からは「ひめゆりが普通の学生生活を送っていた中、戦争がやってきて、軍と共生させられていったことがよくわかった。友達を作るという視点が新鮮で、証言や展示をじっくり見て考えることができた」というコメントがあった。

資料館を見学したのちに、ひめゆり学徒の解散命令が出されたのちに、多くの方が命を落とした沖縄本島最南端の荒崎海岸に向かった。ここで起こったことについて、ひめゆり学徒の宮城喜久子さん（当時 16 歳）は次のように証言している。

敵はアダン林を火炎放射器で焼き、隠れた人たちをいぶり出していました。私たちは平良松四郎先生にとりすがって海岸を逃げ回っていました。グループはもう 12 名になっていました。敵艦はすぐ近くまで寄ってきて、マイクで「米軍が保護する。早く船に乗りなさい。泳げない者は昼間のうちに港川の方向に歩きなさい。夜は歩くな」と言っていました。顔も見えるんです。恐怖で震えました。火炎放射の火は迫るし、生きた心地もしません。

それから後は、喜屋武岬の海岸を潮が引いたら歩き、満ちたら蟹のように岸壁にへばりついて逃げていたんです。岸壁の下は凄い波しぶきでした。怖かったです。精も根もつき果てた私たちは、もう皆で自決しようと話し合っていました。特に 3 年生は「平良先生、今のうちに死にましょう」と苛立っていました。「早くやりましょう。先生」と先生を追い詰めているんですね。先生は先生で、11 人の運命を託されているという責任感と悲壮感で、とても苛々しているようでした。

私は平良先生から手榴弾 1 つをもらって持っていました。宮城貞子、宮城登美子、板良敷良子と私の 4 名は「もう最期だから、歌を歌おうよ」と海に向かって『ふるさと』を歌ったんです。皆かすれ声で、後は声にもならなかったんです。すすり泣きに変わってしまいました。

「お母さんに会いたい」と板良敷良子さんが泣きながら言いました。「もう一度、弾の落ちない青空の下で大手を振って歩きたいね」とも言いました。それを聞くと、皆声を出して泣きました。こんなに追い詰められて死ぬのは悲しすぎると皆思っていたのです。だから一度に泣き崩れたのです。

6 月 21 日の朝、岩穴を見つけて一緒に隠れましたが、狭くて比嘉初枝さんと私と平良先生がはみ出てしまい、それですぐ側の岩にもたれて座っていました。敵はぱったり攻撃を止めて、砲声は耐えていました。不気味な静けさに包まれた入江の海は無数の敵艦が巨

体を浮かべ、岩陰にはたくさんの避難民、兵隊と私たちが恐怖に包まれながら身をひそめていました。

皆が怖がっている放送がまた始まりました。投稿呼びかけのその気味悪い声だけがあたりに響き渡りました。「助けてあげるから手を上げてこい。出てこい」

そしたら兵隊が1人、両手を上げて船に向かっていったんですよ。私たちは目を見張ってその兵隊を見ていました。そしたら突然、パーンと後ろの岩陰から同じ日本兵がその人を撃ったのです。兵隊は撃たれて倒れ、海に浮きました。そこはもう血の海でした。皆びっくりして声も出ません。咳ひとつしない不気味な沈黙が、いつ終わるのかと思うくらい長く続きました。

その時です。突然私のところに血だらけの兵隊が転がり込んできました。米兵に手榴弾を投げつけたため、逆にやられてこちらに逃げ込んできました。「敵だ」と言う叫び声が起こると同時に、平良先生が反射的に9名いる穴の方へ飛び込んでしまったんですよ。私と比嘉初枝さん2人は、すぐ隣の穴に倒れるように逃げ込んだのです。与那嶺松助先生のグループがそこにいました。ほとんど同時でした。

次の瞬間、どこから現れたのか、米兵が私たちに自動小銃で乱射しました。目と鼻の先の至近距離からです。すごい轟音でした。あそこもパーン。こちらもパーンです。

側の安富祖嘉子さんはウーンと唸って私に寄りかかりました。仲本ミツ子さんと上地一子さんの2人も即死。右側の曹長も即死して私の顔の上に倒れてきました（中略）。

私は立ちすくんで、もう声も出ません。最期の場面はほんとに惨いものでした。一瞬の出来事で4名が即死。10名が自決です。地獄そのものでした。

こうした証言には非常に強い力がある。しかしながら「戦争の被害の悲惨さを聽かせる教育」を超えたものを作り出すためには、こうした証言を受け止めるだけではなく、生徒が主体的に当時の状況を想像することができるよう工夫しなければならない。そこで荒崎海岸におけるワークショップでは、フォルジュ（2000）がアウシュヴィッツを教える際、教育実践として提唱した「共感共苦」という手法を用いることにした。フォルジュは住民体験記録を読み解く際に、正確な歴史的事実だけでなく、同時に歴史の犠牲者たちの苦悩を想像し、その苦しみを感じ取ることのできる力、いわば「心情の知性」である共感共苦を生徒の心に育まなければならないと述べている。また竹内（2011）は、日本兵が「なぜ加害者となってしまうのか」を考えさせ、追及させる実践を通して「共感共苦」が重要であることを指摘したうえで、歴史を「自分事」としてとらえさせ「もしあなただったら」という反実仮想の問い合わせによって生徒を揺さぶることにより、平和な歴史をつくる主体の形成につながる可能性について検討を行っている。

これらをふまえ、当人は荒崎海岸で次頁の資料を用意し、生徒に配布した¹⁰。まず証言に基づき、当時の状況について説明を行った。「不気味な静けさに包まれた入江の海は無数の敵艦が巨体を浮かべ」ており、小型船にのった米兵か、「助けてあげるから手を上げてこい。出てこい」と放送を行っている。こうした中、あなたがひめゆり学徒だったら、住民だったら、日本兵だったらどのように行動するか、配布資料をもとにまず班ごとに話し合わせた。

配布資料には、ひめゆり学徒の状況として「手榴弾を先生から手渡されている」「米兵は女を捕まると乱暴するという話を聞かされていた」「もう少し様子を見よう」という生徒に対し、「卑怯者」という生徒もいた」という情報が書かれている。当然のことながら、手榴弾の栓を抜けば、そこには死が待っている。しかし、こうした状況の中では、死を選ぶしかないのではないかという意見も出た。「それまで受けてきた教育」を感じてしまう、その場に先生がいるから逆らえないのではないかというのが主な理由であった。

また、避難していた住民の状況として「食料も水もない」「幼い弟妹や祖父母が弱っている」「敵の捕虜になつたら女は強姦され、男は戦車でひき殺される」という話を村の有力者や兵隊から聞いていた」という情報が与えられる。生徒たちは、何とか逃げて生き延びようとするという結論を出した。

また、日本兵の状況として「部隊が崩壊し、組織的戦闘ができなくなっていた」「武器や食料も尽きていたが、敵の捕虜になることは恥であるという戦陣訓があった」「中国で自分たちの部隊が、敵の捕虜を虐殺した」「上官の命令がないまま投降すると、死刑となる決まりがあった」という情報が与えられる。ここでも生徒たちは、何とか隠れて生き延びようとするという結論を出した。

こうした「共感共苦」の経験をふまえたうえで、「軍官民共生共死」とはいったい何なのか、実際に生徒たちにひめゆり学徒役、日本兵役、住民役、米兵役を割り振り、この場で起こったことを再現することとなる。岩陰に隠れることによって、生徒たちがまず気づいたことはゴツゴツした石灰岩を踏みしめ、岩陰に隠れるまでが一苦労であり、当然のことながら、素早く岩陰から逃げることなどできないということである。次いで、どうしてそんなにたくさん人が入ったのかと思うほど、岩陰が狭いことに気づく。準備が整うと①ひめゆり学徒11名と、「一番奥」に日本兵の曹長たちが隠れていたという状況を再現する。ここで生徒たちは、なぜ「曹長」が「一番奥」に隠れるのか、軍官民のヒエラルキーに気づくこととなる。こうした中、②負傷した日本兵が岩陰に逃げ込んでくる。③驚いた喜久子さんや④沖縄兵は、岩の上に逃げる。⑤そこに米兵たちが追いかけてきて、岩陰に隠れていたひめゆり学徒に投降

¹⁰ この証言は、ひめゆり平和祈念資料館の第4展示室に展示されているものである。荒崎海岸に立ち寄る前に資料館には立ち寄るが、荒崎海岸におけるワークショップは生徒たちの想像力を喚起させることが目的であるため、特にこの証言を読むよう、指示は出していない。



四

ある住民のせり
り月下旬、那覇城も水も無く、金銭料も投降を呼びながら

6. 兵士の状況
兵士たる者はほほと前線、組団的な輸送は出来なくなっていました。武器も食料も足りておらず、敵の情勢になるとそれが敗北の原因となることがあります。そこで、中国では武器の修理を専門とするところを見ていた。また、兵士たる者は必ず軍訓(軍事訓練)を受けたので、武器の操作が他の軍隊を凌駕する力がある。



喜
身

「自決」していた

⑧ 教頭先手榴弾で
む

③教頭先生が飛び込

1



この海岸にはたくさんのお住民、
日本兵、学生が身を隠していた

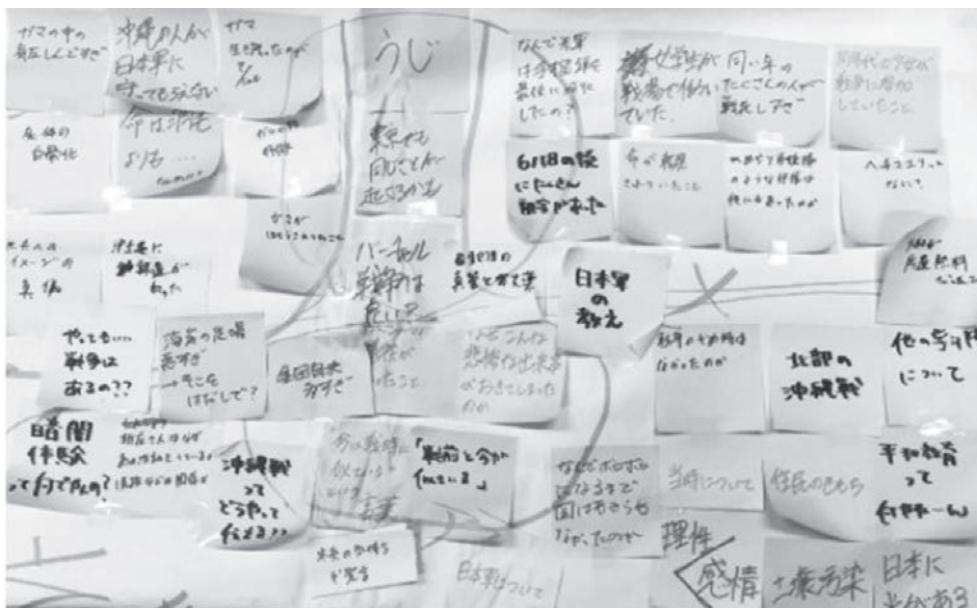
久子さんの証言をもとにした1945年6月21日ごろのイメージ図

資料5 証言に基づいて当時の状況を再現する（ワークショップ配布資料）

を呼びかける——ここまでが、配布資料をもとに、生徒に考えさせたことである。

それでは、実際にどのようなことが起こったのか、再現を続けた。⑦両手をあげて投降していく日本兵は、隠れていた曹長から後ろから射殺された。つまり「日本兵が投降する」という選択を行った場合、待っていたのは味方からの攻撃であり「死」だったのである。生徒たちは、ここに軍の本質を見いだし、共感共苦することとなる。さらに米兵は、⑧隠れていたひめゆり学徒と日本兵の曹長を射殺した。つまり、隠れていたひめゆり学徒や日本兵を待っていたのも「死」だったのである。それと同時進行で、ひめゆり学徒や避難住民は集団自決を選ぶ。つまり隠れても、逃げたとしても、投降したとしても、そこに待っていたのは「死」以外にないことを、生徒たちは実際にそれらが起こった「現場」で再現をおこない体感する。こうして戦争や軍隊というものが生み出す暴力性について共感共苦させつつ、それらが生み出される「構造」まで生徒一人ひとりが考えを深めさせることができた。

ホテルについてからは、1日を通して感じたこと、考えたことを班ごとにふりかえった（写真29・資料6）。生徒自身が平和とは何か、なぜ平和が大切か自由に発言し、考えができる場にするべく、あえて筆者はふりかえりに加わらず、生徒たちにディスカッションを任せた。こうした中「結局住民や兵士が切り捨てられた。現場の人間はいつも中央から切り捨てられて、苦しむことになる」「人が道具にされ、選択する権利さえ奪われてしまった」ということがよくわかった」「軍による洗脳教育が、福島の安全神話と似ていると感じた。上から言われてしまうと、情報の正確性について知らない、立場の弱い住民は信じるしかなかつたのではないか」といったコメントに見るように、生徒たちは「軍官民共生共死」



資料6 1日目夜のふりかえりで用いた模造紙の一部 (A班)

について「共感共苦」することができたといえるだろう。「そもそも戦争はなぜ起るのか」「どうしたら戦争を止めることができるだろうか」といった本質的な議論が続いた結果、ディスカッションは、予定時刻の夜9時を過ぎても、なかなか終わらなかった。

第3節 <2日目> 沖縄戦と基地問題をつなげる

午前中は、沖縄県平和祈念資料館と平和の礎で「平和ガイド実践」のワークショップを行った。これは、実際に沖縄戦で亡くなった方の証言や情報を資料館で探し、亡くなるにいたった背景を他人に「伝える」という経験を実践することによって、沖縄戦を24万人が亡くなる戦争が1回あった(24万×1)と抽象的にとらえるのではなく、軍官民が協働することによって、一人ひとりに対する殺人が24万回行われた(1×24万)と個別的に考えることを目的とする。また、平和を他人に伝える難しさを体感することによって、沖縄戦体験者が亡くなっていく中、どのようにすれば平和を創っていくことができるか、主体的に生徒に考えさせることを目的とする。

まず生徒には次頁のようなワークシートを配布し、この人物がどのように亡くなったか、資料館で情報を探してくるように指示を行う(資料7)。例えば、大城さよ子(15歳)さんの最期は、従姉妹である古波鯨登美子さんによって次のように証言されている(二重下線部は筆者による)。

斬り込みに出ていった人の中から砂辺、比嘉という沖縄の人と名前の知らない本土出身の三人の兵隊が戻ってきました。そして米兵がすぐそこまで来ているし、「もう伊江島は駄目だから自爆しようね」と言いました。この兵隊さんたちが、「一、二、三」と号令をかけるから全部で手榴弾を破裂させなさいと命令しました。比嘉さんが三味線弾きながら「いち、に、さん」と言い、あちこちでパンパンパンと手榴弾を破裂させました。私も信管抜いて壁に打ちつけましたが、破裂しませんでした。私は手榴弾を丸っこいものと四角のもの二個持っていたのですが、隣にいた姉さんに一個こっそり取られていきました。この人は救護班員ではなかったので、手榴弾を持っていなくて、私が風邪ひいて寝込んでいるときに取ったようです。私のものは丸いものでしたが、破裂しなくて命が助かったのです。あの姉さんの弾は四角の方で、破裂して亡くなりました。

私の家族では、おじいさんとおばあさんが亡くなりました。一緒に救護班員だった従姉妹のサヨ姉さんもその時に腕が切れました。そして、「水飲ませて、おしつこでもいいから飲ませて」と言ってました。すごく喉が渴くのだと思います。サヨさんも出血多量で亡くなり、サヨさんの両親や妹もその時に亡くなりました。

私がランプをつけると、腸が全部飛び出で苦しんでいるおばさんを見つけました。そし

自らガイドしてみる新たなフィールドワーク 中央大学附属高校 '19

▶▶ 証言調査

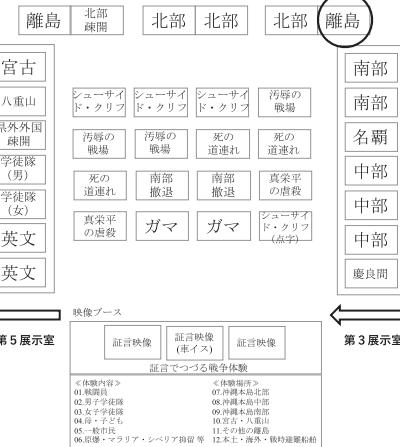
・実際にガイドをするための情報を県平和祈念
資料館の証言や説明板から探してこよう!

平和



第4展示室で【大城さよ子さん】
について調べてきてください!

氏名	大城さよ子さん
出身地	伊江村西江上
証言者	古波鮫登美子さん(後輩)
生年月日	
死亡日時	
戦没年齢	
死亡場所	



自らガイドしてみる新たなフィールドワーク 中央大学附属高校 '19

▶▶ 証言調査

・実際にガイドをするための情報を県平和祈念
資料館の証言や説明板から探してこよう!

平和



大城さんに関連する情報を追加で調べよう!
「日本軍の強制による集団死」(第2展示室)



大城さんに関する他のキーワードを
自分で探してみよう

資料7 ガイド実践のためのワークシート (ワークショップで使用)

て「くびってくれ、くびってくれ」と言うので、私が腸を中に入れ、黒い帯でその長を押して巻いていくときれいにおさまっていました。血もいっぱい出していました。でも帯がとけてしまい、また腸が出てくるのです。それでまたおさえて、腸をお腹におさめました。こんなにしても半時間以上は生きていました。

あっちでもこっちでも「助けて」「水飲ませて」と、ワーウーしていました。長い髪がとけて、顔もみな真っ黒になって、生き地獄のようでした。あの自爆で比嘉さん、砂辺さんたち、兵隊は皆亡くなりましたが、私の家族では母と妹二人は生き残り、従姉妹も三、四名は助かりました。私も命は助かりましたが、すぐ側の爆発でしたから破片は身体に入っています。左目の上に今も残っていて、押したらチクっします。レントゲンでとったらよくわかります。左の頬のものは十年後に病院で取ってもらいました。

こうした証言を受けて、生徒たちはなぜこのようなことが起こったのか、考えることとなる。「なぜ斬り込みに住民が参加しているのか」「手榴弾はどのような形なのか、どうすれば爆発するのか、そもそもなぜ手榴弾を持っていたのか」「集団自決に対する命令はどのように出されたのか」「一家離散の証言はどのように残ってきたのか」「なぜ治療は10年間もできなかったのか」等々、二重下線部を引いた点を中心に、生徒たちはこれらのことがどのようにして起こり、結果として大城さんがどのような最期を迎えたか、説明するために資料館をまわって情報を集めることとなる。

今回はワークショップ実施にあたり、強制疎開によって戦争マラリアの犠牲となった辻征彦さん（武富町）、ガマの中で0歳で餓死することとなった屋宣和子さん（大里村）、対馬丸による戦時疎開の犠牲となった大城ウミトさん（読谷村）のお名前を使わせていただいた。こうした実践を通して、生徒たちは戦争による死を抽象的な死としてではなく、個別的・具体的な死としてとらえ、なぜそのようなことが起こってしまったのか、知ることとなる（写真30・31）。また、戦争の犠牲がいわゆる攻撃による死だけではなく、一般住民の中には強制疎開や収容所におけるマラリア蔓延による死などいわゆる「戦争関連死」が見られることにも気づくこととなる。ここで生徒が想起するのは、フクシマで聞いた「震災関連死」の話であろう。現在のところ原発事故による被ばくが原因で亡くなった方はいない。しかしながら、避難の過程において震災関連死が生じるようになり、現在にいたるまでそれは続いているのである。

平和の礎のその方のお名前が刻まれている前で行った「平和ガイド実践」を通して、当然のことながら生徒たちはその方の人生をすべて語ることなどできない。こうして生徒たちはその方の人生を知り、戦争とは何か、他人に伝えるためには、深い学びとそれを伝えるための工夫が必要であることを、身をもって体感する。

昼食後には、ひめゆり平和祈念資料館から5分の距離にある第一外科壕に向かった。ここでは、筆者から「戦跡の観光地化」と「慰靈とは何か」について話を聞いた。沖縄の観光は、慰靈観光から始まったという歴史を持ち、現在も資料館前にはお土産物屋がたちならび、客を奪い合っている。しかし、そこからわずか5分離れた民家の裏に、多くの方が亡くなった第一外科壕がひっそりとある。このように現在は何でもないように見えるいたるところに沖縄戦は確かにあった。筆者からは「戦跡が観光地化され、立派な石碑が建つことで失われるものは何であろうか」「慰靈とは何であろうか、亡くなった方を英雄として仕立てあげることによって、何がもたらされるのだろうか」という問題提起を行った。

午後は、宜野湾市にある嘉数高台に向かった。まず米軍に攻撃され、鉄筋がむき出しになるほど破壊されたトーチカを見学した（写真32）。ここではトーチカが「攻撃対象」として扱われた——現代に置き換えると、「抑止力」としておかれている米軍基地も「攻撃対象」としてみなされるのではないかという視点を学んだ。また、この集落に日本軍が来た際に、住民はおかしいと思わなかつたのだろうかという問題提起が行われた。日本軍は学校を占領し、大きな家に住み始める。こうした行動に対し、はじめはなぜそんなことをするのか、疑問に思うが、数か月もすれば慣れてくる。そうしたことが戦時中にあった。現在もそのようなことはないだろうか。よく沖縄の人は生まれた時から基地があり、それがあたりまえだと思って生活しているが、そもそもそれ自体がおかしなことである。しかし、生まれたときからそのような環境で育つと、それがおかしいと思えないのではないか。そうしたときに、だれが、どのタイミングで声を上げることができるのだろうか、という問題提起も行われた。

さらに高台の上から普天間基地を見学し、オスプレイの飛行ルートを確認した（写真33）。また、普天間基地が強制収用される前、この地に住民が住んでいたことを基地に沿って生える松並木をもとに確認し、「普天間基地はそもそも何もなく、商売するために後から人が住み着き、軍用地料や補償をゴネている」というフェイクが創られていることも確認した。

次にフェンスのすぐ隣の上大謝名公民館と上大謝名さくら公園を見学し（写真34），基地内にある墓地や住民が基地と隣接して生活している実態を学んだ。公民館で行われたふりかえりでは「沖縄戦と軍官民共生共死」「基地問題と経済」「平和教育のあり方」の3グループに分かれ、学びを深めた（写真35・36）。この日の学びに関して、生徒からは「第一外科壕を見て、普段だったら、なんの変哲もない風景や、いつもの遊び場、学校が急に外部からの影響で戦場になったり、「戦跡」呼ばわりされるのは無慈悲というか、ナイチャーの勝手だなと思った」「あたりまえだと思ってることに疑いの目をむけておかしいと思ったことに声をあげることが大切だと感じた。沖縄戦はこのように集団心理や教育に流されて、あたりまえのことを疑おうともしなかったことも起こった原因なのかなと思った」「軍官民共生共死について、いきなりあたりまえになった訳ではなく、そこにいたるプロセスがあった」と

いう言葉が印象に残った。「あたりまえを疑え」と簡単に言うけれど、何があたり前なのか、いつも無意識に通り過ぎていることを丁寧に吟味していかないといけないと思った」というコメントが見られた。

「軍官民共生」「観光地化される戦跡」「目の前に広がる基地」「経済発展」「平和教育」など、生徒たちは徐々にあたりまえのことを自ら問い合わせなおす批判的能力を身につけ始めた。また沖縄戦と基地問題は同じような構造的問題を孕んでいることにも気づき始めた。こうして学びは日ごとに深まっていくこととなる。

第4節 <3日目> オキナワとフクシマをつなげる

午前は、那覇から辺野古へ向かい、まず土砂投入が行われている様子を見学した。次に辺野古の集落を歩きながら、辺野古という街がどのように作られ、200軒のバーが立ち並んでいたベトナム戦争の頃を経て、現在集落はどのようにになっているか、実際に歩きながら体感した。その後、辺野古への基地建設がもたらされたときに反対運動を始めた住民団体「命を守る会」元会長の西川征夫さん、条件付きで容認の立場をとる元商工会会長の飯田昭弘さん、自民党の青年部長として県知事選挙に関わった嘉陽宗一郎さんにお話を伺った。基地建設に反対・容認の立場の住民が同時に対談を行うことは珍しく、当日はN H K 沖縄、琉球放送、沖縄タイムス、琉球新報の取材が入ることとなった¹¹（写真37）。

お三方との対話は、筆者が司会者となり、パネルディスカッション形式で行った。まず、西川さんから自身が若いころに「アメリカ人の生命、財産」を守る仕事として、基地内のガードマンとして働いていたこと、ベトナム戦争の頃は、血の付いた軍服や弾痕の跡がついたMトラック、そして棺桶がたくさん返ってきた、それをみて本当に戦争はいやだという思いを抱いたこと、その一方でガードマンをやめてからは、本土ゼネコンである大成建設で建設業として働き、自民党の青年団員でもあったという自己紹介をしていただいた。西川さんは、普天間が返還され、辺野古沖に基地が作られると聞いたときは、千載一遇のチャンスで仕事が増えると考えていたという。しかし、実際に海上に出て作られる基地の規模を知り、また基地がもたらす弊害についての学習会に参加したことを機に、立場を賛成から反対に変え、「自分たちの生命や財産を守る」ために住民団体である「命を守る会」を立ち上げた。また、辺野古に基地ができたとしても、個別補償金は支払われないという回答が防衛省からされたことをきっかけに、区民の間でも少し意識が変わったように感じるというお話ををしていただいた。

次いで飯田さんより、自分自身がベトナム戦争時に商売をするために辺野古に引っ越しして

¹¹ 次頁に掲載したように、この様子は当日の琉球放送の県内ニュース、翌日の沖縄タイムス朝刊、琉球新報朝刊で報じられた。また、N H K 沖縄では2019年12月26日に県内で放送された特集「辺野古 住民たちの思いは」において放送された。

辺野古思う心 率直に

建設容認と反対 住民ら論議



意見交換は、社会学習の
ため沖縄を訪れた中央大学
付属高校（東京都）の生徒

西川征夫さん、飯田昭弘さん
辺野古一郎さん＝23日 名護市

18人に向け辺野古で行われ
たもの。同校の川北慧教諭
(33)が「立場の違う人たち
の意見を聞いてほしい」と
企画した。新基地建設を巡
り、容認、反対の区民が公
の場で同所し、意見交換す
ることとはまれだという。

西川さんは、基地の利害
を争えるとデメリットが大
きいとし、「1%でも止める
可能性があるのなら反対
続けたい」と訴えた。さ

る年後年の話をすることが必
要」と、長い目で見た地域
活性化の重要性を強調
した。その上で「地域の人々
の気持ちをくんでもらい、
いろんな人の考え方を基に自
分の考え方を持ってほしい」
と生徒に呼び掛けた。

裏陽宗さんは「辺野古の問
題は賛成か反対か、意見表
明だけではなく、その折り合
いをつけるための議論が必
要」と指摘した。

参加した女子生徒は「立
場は違っても、自分の地域問
題が発展し、平和に暮らしあ
いという思いは同じだと分
かった。東京に戻って話を
伝えたい」と述べた。

【名護】名護市辺野古の新基地建設を巡り、地元で金物店を営んできた基地建設に反対する西川征夫さん（75）と、条件付きで建設を容認する辺野古商工社工業組合元会長の飯田昭弘さん（71）が23日、本土の高校生を前に辺野古の現状などについて意見交換した。2018年の県知事選で自民系候補者を支援する会の青年部長を務めた裏陽宗一郎さんも参加。それぞれの意見を述べた上で、対話を踏まえて自分の意見を持つことの重要性を訴えた。

東京の高校生らに現状訴え

一方、飯田さんは「基地
はないに越したことはな
い」としながら、政府が閣
議決定し、長年計画が止ま
らないことに触れ、「活気あ
る町づくりのため宅地造成
などを考へ、50、100年後の話
をすることが必要」と述べた。

裏陽宗さんは「辺野古の問
題は賛成か反対か、意見表
明だけではなく、その折り合
いをつけるための議論が必
要」と指摘した。

資料8 辺野古での対話をとりあげた新聞記事
(沖縄タイムス 2019年12月24日 朝刊)

きたこと、当時ベトナムに出征する兵士は「明日の身が分からない」ということでお金を使い果たし、食堂やバーの売り上げが月300～500ドル（当時の物価で家を一軒建てることができる金額）あったこと、現在ゴーストタウンになっている集落が人で埋め尽くされ、歩けないほどだったというお話をしていただいた。また現在の立場としては、もう手をあげて基地に来てほしいと思ったことなどない、基地なんてない方がいいに決まっているが、日本と

いう国家があり、日米安保というものがあり、国策として辺野古が策定された以上はもう反対できないのではないか。その一方で、現在の法律をふまえると個別補償を行うのは不可能だという通知が防衛省から行われており、現在集落が行っているお金の要求を続けることは意味がないと考えている¹²。北部振興金や再編交付金など国民の税金が1兆円近くつぎ込まれているが、辺野古は何の恩恵も受けていない。辺野古の50年先、100年先のことを考えることができるような、例えば若者が定住化できるような生活環境整備や、海岸のリゾート開発などの政策を訴えていくべきだ、というお話をしていただいた。

その一方で、そういった立場の違いから、地域が分断されている現状についても二人からお話しeidaitai。西川さんからは、兄弟が海人であり、現在埋め立て工事の警戒船として沖に出ることによってお金をもらっている。しかしながら、工事が終わればもうメリットはなくなってしまうのではないか、メリットとデメリットを天秤にかけた場合、どう考えても集落の住民にはメリットがないと考えている、それを区民に訴えていくための住民運動として「命を守る会」は誕生し、それを区民に伝えていきたいという気持ちは変わっていない。こういった容認派・反対派で集落が二分されてしまった結果、親兄弟、隣近所など様々などころでいさつすらできなくなってしまっている、というお話をしていただいた。また、飯田さんからは、振興策の一つとして国立高専が建設され、商工会としてもこの生徒たちに集落に遊びに来てほしいと考えたが、集落の整備が全く進んでいないため、高専の生徒たちはみんな名護市内に遊びに行ってしまう、また金融特区として企業誘致も行ったが、宅地造成がなされていないため、まったく人口が増えず、スーパーすらないなど振興策がうまく進んでいない現状についてもお話しeidaitai。

嘉陽さんからは、生まれた時からこの問題があり、家では基地問題についてはあまり話さない方がいいという教育を受けてきたこと、とはいえた選挙ではいつも基地問題が争点になってしまっており、昨年自分自身もはじめて選挙に関わった結果、思った以上に若者が基地問題について全く何も考えていないことを知ったこと、などをお話しeidaitai。また飯田さんからは、若者が基地問題に関心がないのは、戦後生まれの世代が沖縄戦の血泥をすり生きてきた親世代に沖縄戦の話を聞くが、興味を持つことができないのと同じではないか。そういう意味では、生まれた時から基地がある若者たちが、基地問題に関心を持つことができない、生活の糧を得る場としか思っていないのではないか、という話も出た。

さらに昔から辺野古に住んでいる人は、軍用地料を受け取ることができる。また、米兵相

¹² 現在辺野古区は、生活補償として①辺野古区に対しての基地がある限りの永続的な年間補償②辺野古区民に対して基地がある限り1世帯あたりの永続的な補償③移設時の辺野古区民に対する見舞金の実施④国、県、市が締結する使用協定の完全なる実施⑤騒音に対する防音対策の実施（空調設備を含む）をはじめとして9つの条件の防衛省に対して提示している。こうした条件闘争を通して、補償金を受け取ることのできる「区民」が定義づけられ、厳格化されていく過程に関して筆者は研究を行っている（川北 2011）。

手に発展してきたという歴史があり、ベトナム戦争のころは事件事故も多く起ったが、現在は兵隊の人員も減り、そういったことはほとんどないという話も西川さん、飯田さんからしていただいた。その後行われた質疑応答は以下のとおりである（長時間にわたったため、一部分のみ要約して掲載した）。

生徒：沖縄の人に何かをしたいという思いから嘉陽さんは政治にかかわったということだが、県民投票で多くの県民が反対しているということをどのようにとらえているか。

嘉陽：現在は「県民投票で多くの人が反対している」という状況と「法的に瑕疵がない」という事実が二つ同時に存在している。こうした中で、お互いが納得できる妥協点を探していくしかない。

生徒：どうやったら妥協点は探せると思っているか。

嘉陽：使用期限を定める、集落の上は飛ばないようにする、地元が納得する振興計画を作るなどの方法があるのではないか。

生徒：集落の上は飛ばないようにするというのは、あたりまえのことだと思うが、現在そういうことが守られていないという現実がある。どうしてそういうあたりまえのことが守られていないと思うか。

嘉陽：推測に過ぎないが、日本政府が強くアメリカに言っていないからではないか。

生徒：そうだとして、反対する住民のことを切り捨てるとはできないのではないか。この問題を解決すべきなのは、住民ではなく政府ではないか。

嘉陽：逆にこの問題をあなたはどうすればいいと思っているのか。どうすれば住民は納得するのか。

生徒：反対し続けて、結局政府によって基地が作られてしまうのは意味がない、条件闘争しなければ、という立場の人の気持ちもよくわかる。一方で、反対という意志を持って、それを表明することに価値があるし、そういった人を否定できないのではないか。

嘉陽：今まででは、賛成か、反対かで話が止まってしまっていた。そして分断がもたらされていた。これからは、共通した納得できる部分を見いだすしかないのではないか。

西川：日米地位協定というものがあり、沖縄の中で非常に問題になっている。そのあたりをしっかりと勉強して、本当に日本政府がアメリカにものを申すことができるか、もういちど考えてほしい。

飯田：地位協定の改定は実際に難しいと思う。少女暴行事件の後に、運用を改善ということで、日本が起訴前に身柄の引き渡しを求めた場合は「好意的配慮」が行われることになったが、それが限界だと思う。なぜならアメリカの立場に立つと、アメリカは自国民の「生命や財産、自由」を当然守らなければならないからだ。

生徒：昨日の大学生ともディスカッションしたことだが、どこまで沖縄のことを知ったら、私たちは発言してもいいと考えているか。もしくは聞いてもらえるのだろうか。

嘉陽：意見を持つということは、当事者意識を持つということである。そういった意味では、意見を持った時点で当事者として考えている、つまり意見を言っていいのではないか。沖縄の一番ダメなところは、「基地どうでもいいんじゃねーの」という当事者意識がない人が多いことである。いろいろな立場の人の話を聞き、調べ、意見を形成していってほしい。その作業に終わりはないし、これからも学び続けていってほしい。

飯田：ものを言うときに、交わるということが大切だと思う。「もの言えぬヘノコンチユ（辺野古住民）」という風に言われるが、ものを言うということは、対立を招くことに発展する可能性がある。だからこそ、ものが言えなくなってしまっている。そういった中、リーダーシップをとる人が重要だ。ぜひ若者たちにリーダーシップをとってもらいたい。

西川：辺野古の人にいろいろマスコミがインタビューに来るが、ほとんどの人は答えてくれない。私は「答えてくれない」のではなく、「答え切れない」のだと思う。みなさんがこうやって自主的に来てくれているということは、関心があるということだと思う。関心を持ってくれているなら、ぜひ話してほしい。基地問題だけでなくいい。日本にはいろいろな社会問題がある。伊江島の基地闘争を戦った阿波根昌鴻は、「平和の最大の敵は無関心である」という言葉を残している。ぜひ、関心を持ち続けてほしい。

辺野古での対話は時間を大幅に過ぎて終わった。「容認」の立場をとる飯田さんが「もう手をあげて基地に来てほしいと思ったことなどない、基地なんてない方がいいに決まっている」というように、辺野古に基地を建設することに「賛成」している住民などいない。国策として、基地が押し付けられた結果、容認せざるを得ない状況が作り出されているのである。生徒のコメントには「基地問題は容認・反対のみではないということを改めて学んだ。また、家族内でも意見が食い違うこともあるということを知った。ただ、話し合うだけではまったく解決しないし、こんなことをぐだぐだ続けていても何も変わらないのではないかと少し思ってしまった」「（沖縄タイムスの取材に対して答えた内容ですが）基地問題について、色々な人が自分の理想とする生活があって、それをただぶつけあってるだけで、この問題はきっとそれぞれ折り合いをつけて解決出来ずに、誰かが折れて終わる形になるんだと思った。たぶん特殊意志をぶつけ合っているだけの状態だから、ルソーの理想の社会契約論のように特殊意志や全体意思から一般意志を目指すような形でしか解決できない問題だと思った」というものがあった。

後日談であるが、前頁の新聞記事がYahooニュースのトップページに一時的に掲載された。そのコメント欄には「高校生が可哀想　こんな事に巻き込まれて　せっかく沖縄に来たのだ

から遊びたかったんだろうに きっと、沖教教（原文ママ、沖教組の誤り？）に入っている先生に参加するように言われたのかと…。」「自意識過剰！観光に来た高校生がそんなもんに関心持ってるとは思えません。お付き合いで返事しただけだと思います」「そんなに文句があるなら辺野古からみんな引っ越せばいいのに。祖国が皆さんあります。ですから韓国から手伝いに来ています。公安に逮捕されていますけど。」「分かりやすいです。北崇拝チュチュ思想反日活動家と日本人の戦いです」といったコメントが次々に書かれ、「イイね！」が押されるということが起こった。

これに対して、生徒からは「さすがにこのコメントには笑ってしまった。と同時に悲しくなった。沖縄の人たちはいつもこうした思いをしているのかと怒りとともに無力感を感じた」「Yahoo のコメントをみて最初に思ったのは、フクシマの人たちが感じている風評被害やいじめはこういった構図なんだということだと感じた」という感想がみられた。特筆すべき点は、生徒たちがこうした「炎上」を相手にすることなく、むしろフクシマやオキナワの人々に思いをはせたことである。生徒たちは当事者の目線に立ち、無責任に発言する人々に対して共に怒った。これこそ、フォルジュが言う「共感共苦」を体現したものであったということができるだろう。こうして、生徒たちは沖縄戦や基地問題、原発事故が共通して持つ構造やフクシマやオキナワに対する差別的まなざしを体感することとなったのである。

午後は大浦湾でシーカヤックに乗り、埋め立て工事が行われている現場に近づきつつ、マングローブやサンゴを観察し、沖縄の自然を満喫した（写真 38）。また「ジュゴンの見える丘」では、地元瀬嵩の住民の方から、人間と自然がどのように共生してきたか、生物多様性の観点からお話を伺った（写真 39）。生徒からは「午前中の容認派の 2 人は、地位協定を覆すことが現実的ではないから、地元振興策の方へシフトするべきという考え方だった。基地建設を止められるという希望が少しでもあるとどこか楽観的に考えていた私にとってはとてもショックだった。けれどもジュゴンの見える丘で、しんさんのどうやって自然が成り立っているかという話を聞いて（彼は多くを語らず事実を淡々と話していただけだったけれど）「辺野古埋め立ては阻止できないなら地元にとってより良いことをする方にシフトするしかないんだなー」と午前中、諦観に支配されてしまっていた自分が情けなくなった。悪あがきであっても守る価値がある海だと思った」というコメントがあった。夜のディスカッションでは、フクシマとオキナワを比較しつつ、どのようにすればこの問題を伝えることができるか、真剣にディスカッションが行われた（写真 40）。やや長くなるが、生徒の感想を 1 つ引用することにしよう。

基地を受け入れれば経済的に発展できるという人と、基地がなくても経済的に成り立っているという人がいて、地元の分断を感じた。結局基地を受け入れる条件として何が必要

なんだろう。そもそも基地を受け入れるしかないのかというのがおかしいのではないか。そもそも戦後100年近く経つのに、まだアメリカにこんなに支配されてるのはおかしいのではないか。これから戦争を体験してない世代だけになっていく中で、私達はいつまで「敗戦」という事実を背負わなければならないのだろう。

沖縄や福島だけではなく、慰安婦問題をはじめとした日本と他国との過去の確執、国内に残された暗い部分のことを考える時に、「関心を持て」とか「私たちの問題でもある」と言われることがある。どれだけの時間が経てば、私たちが生まれる前の世代が残していく負の遺産に対しての責任が消えるというか、消えはしないと思うけど、いつまでそれが新しい世代に付きまとうんだろう。私は日本という国自体に特別愛国心みたいなものがあるわけではないが、身に覚えのないことずっと責められているというか、でも無意識に差別してきたという歴史を考えると、めちゃくちゃ規模でのかい連帯責任を感じるようになった。

「構造的差別」は根深い問題である。この生徒が、「いつまで「敗戦」という事実を背負わなければならないのだろう」と述べているように、この問題は、辺野古一名護市一沖縄県一日本一アメリカという力関係の中でもたらされている。そうした中、この生徒は「どれだけの時間が経てば、私たちが生まれる前の世代が残していく負の遺産に対しての責任が消える」のだろうと問い合わせ、「消えはしないと思うけど（中略）めちゃくちゃ規模でのかい連帯責任を感じるようになった」と述べている。

本章の冒頭で述べた通り、社会問題に「第三者」など存在しない。この生徒は、こうした構造において最も虐げられている人々と対話することによって、基地問題を「私たちの問題」としてとらえている。さらにそうした視点を持つことができなかつたのは、私たちに内在する「無意識な差別意識」であることに気づきつつある。

第5節 <4日目・5日目> 日本にとって沖縄とは何か、考える

4日目の午前中は、海洋博公園を歩きながら、どのように沖縄西海岸の開発・埋め立てが行われ、「沖縄イメージ」が作られたか、多田（2004）の論考をもとに筆者が説明を行った。また水族館では、昨日説明を受けたジュゴンとよく似たマナティの観察を行い、違いについて学んだ（写真41）。さらに海洋文化館では、海洋博覧会がどのようなオリエンタリズム的視点によって創られ、科学の力を用いたどのような「近未来」が展示されていたか、ソ連館の海底原子力発電所やアクアポリスの海洋牧場の展示などをふまえ、筆者が説明を行った（写真42）。

午後は伊江島に渡り、伊江島で民泊をはじめられた山城克己さんから、伊江村が民泊を導

入したきっかけや基地返還後の跡地利用策（観光計画）などに関するお話を伺った（写真43）。山城さんは伊江村議会議員や軍用地主会会长をされていたこともあり、生徒からは基地をどのように考えているかに関する質問があいついだ。その後生徒たちは、5日目のお昼まで各家庭の下で魚釣りや牛の世話、サトウキビ収穫などの家業体験や平和学習を行った（写真44・45・46）。「おじいやおばあに戦争の話を聞いた」「軍用地について議論したが、意外と伊江島の人が全然知らなかったのが驚きだった」と生徒が言うように、「沖縄の縮図」といわれる伊江島の各家庭で生徒たちは対話を重ねたようである。

伊江島で各家庭の見送りを受けた後は（写真47・48）、一路那覇のおもろまちへ向かい、シュガーローフヒルから那覇の街を一望した。ここは沖縄戦の激戦区であり、日米合わせて5000名の方が亡くなった場所である。さらに戦後は米軍基地として接収されていたが、1987年に返還され、現在は那覇新都心として高層ビルやホテルなどが立ち並んでいる。生徒には、この地が返還される前、米軍基地から得ていたのは50億円だったが、現在は32倍の1600億円の経済効果がもたらされていることを紹介した。そもそも米軍基地によって得られる経済効果は、現在5%に満たず、少なくとも本島南部・西海岸においては「基地依存経済」は幻想といえる。しかしながら東海岸や北部、離島にある米軍基地がもたらす軍用地料を考えた際、これを「幻想」と言い切ることはできない。

最後に筆者は、シュガーローフヒルの反対側にホームレスがたくさん生活していることも紹介した。沖縄は、全国で4番目にホームレスの数が多い。さらに貧困率は全国最高である。しかしながら、そもそも社会保障の充実と引き替えに、「自らの安全と生存」を犠牲にしてまで基地は受け入れなければならないのであろうか。すべて国民は生命、自由および幸福追求に関する権利を保持しており、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を持っている。「あたりまえのことを疑うこと」と「あたりまえのことをあたりまえに実現することができる世の中を構築すること」こそが求められているのではないか、という問題提起を行い、オキナワ実地調査を終えることとなった。

おわりに

冒頭に述べた通り、本授業は本授業ではどのように科学が社会化・制度化され、それによってどのように「光と影」が生み出されているのか、明らかにすることを目的とした。本論文を書いているのは2020年1月であり、生徒たちがさらに学びを深めることとなる3学期の授業実践や最終レポートに関しては、残念ながら本論文でふれることはできない。こうした中、オキナワ実地調査の後に「沖縄への思いが強まり、大学で沖縄のことについて学びたいと考えるようになった」というメールが実地調査翌日に生徒から届いた。このメールに添付されていたエッセーを紹介して、むすびにかえたい。

沖縄は初めて行った小1の頃からずっと好きで、自分なりに浅いながらもいろいろなことを考えてきた。だからこそ授業内で学び始めた時から、今まで知らなかった現実を知るのが怖かったようにも思う。

沖縄から帰った今考えてみても、達成感よりも沢山の衝撃と疑問と無力感の方がはるかに大きい。どこまで知っても私は本当に沖縄が好きだと言えるけれど、どこまで知ったら沖縄について語ったり、行動することができるのか、誰にどんなアドバイスを受けても、ずっと分からぬような気がする。自分なりに意見は持っているけれど、自分自身にはまだ、権威のある人にそれらしいことを言われてしまえば頷いてしまいそうな脆さがある。だからこそ、これからも学びを深め、自分の考えをもっと柔軟さを持ちあわせたものにしていきたい。

旅の出来事のひとつひとつに意味があるから順位はつけられないけれど、印象に残ったのはジュゴンの見える丘や荒崎海岸からの景色、そしてジュゴンの見える丘と伊江島で出会ったおじいの言葉だ。景色はものを言わなくても、感覚とともに実体験として強く印象に残っている。おじいは立場や意見を大きな声で主張しない。おじいの前では私も沖縄の問題について話したいとは思わなかつたし、実際自分から全く話さなかつた。多くのことを語られなくても、全てのことが理解できなくても、おじいの言葉には、他にはない重みと心に響くものがあった。

これからさらに沖縄を学んでいくのは怖いし、もしかしたら離れたくなる時も来るかもしれないけれど、まだまだ沖縄のことを知りたいと思う。忘れたくないという気持ちを決して忘れないようにしたい。

科学技術がもたらした「影」に私たちはしばしば立ちすくむ。しかしフクシマ・オキナワの地に生きる人たちが、構造的暴力的差別と忘却に抗っている中「私たち」も共に当事者として——こうした構造を作り出している加害者であることを自覚しながら、逃げることなく答えのないこれらの問題について悩み考え、向き合い続けることによって、はじめて科学技術を——そして社会を私たちの手元に取り戻すことができる。「こうした問題を知ってしまった」「現地で立ちすくんだ」という衝撃と経験を「忘れたくない」と心に刻むこと、「さらに学んでいくのは怖い」としながらも、「学びを深め、自分の考えをもっと柔軟さを持ちあわせたものにしていきたい」と決意し、答えのない困難な問いに立ち向かおうとすることこそ、真に豊かな社会を構築するための力強い第一歩となるに違いない。

謝辞

2019年度のフクシマ・オキナワ実地調査を立案・実施するにあたり、関係の皆様に深く感謝いたします。中でもこの授業を履修した生徒・保護者の皆さんには、実地調査の主旨をご理解いただきましたことを、この場を借りて厚く御礼申し上げます。ならびにフクシマの実地調査にご同行いただいた福島県観光交流課の佐藤良作さま、福島県観光物産交流協会の大関秀樹さまには、生徒共々大変お世話になりました。また、オキナワ実地調査に関しては、近畿日本ツーリストの山田史昭さまに、筆者自身が思い描く行程を実施することができるようご対応いただきました。改めて深謝いたします。

参考文献

- 東浩紀 2017『ゲンロン 0：観光客の哲学』ゲンロン。
- 新崎盛暉 2016『日本にとって沖縄とは何か』岩波新書。
- 井出明 2013「チェルノブイリダークツーリズムガイド」東浩紀ら編『思想地図』β vol.4-1 ゲンロン。
- 緒方正人 2001『チッソは私であった』葦書房。
- 沖縄県平和祈念資料館 2011『平和への証言：体験者が語る戦争』沖縄県平和祈念資料館。
- 開沼博 2012『フクシマの正義：「日本の変わらなさ」との闘い』幻冬舎。
- 川北慧 2011「米軍基地がもたらしたもの：基地の集落（シマ）の民族誌」一橋大学大学院 学位請求論文。
- 川北慧 2019「ふくしま学宿の実施」『平成30年度指定スーパーサイエンスハイスクール研究開発実施報告書 第1年次』中央大学附属高等学校。
- 川北慧 2020「「平和共育」の可能性：沖縄修学旅行の実践を通して」『生活教育』853号 PP.42-47 日本生活教育連盟。
- 川北慧・頓野綾子 2019「「修学旅行」のあり方を考える：中央大学附属中学校7期生の実践を通して」『教育・研究』38号 pp.77-122 中央大学附属中学校・高等学校。
- 小林傳司 2007『トランス・サイエンスの時代：科学技術と社会をつなぐ』NTT出版。
- 沢井実 2015『帝国日本の技術者たち』吉川弘文館弘文館。
- 清水一利 2015『フラガール物語：常磐音楽舞踊学院50年史』講談社。
- 下嶋哲郎 2015『平和は「退屈」ですか：元ひめゆり学徒と若者たちの500日』岩波書店。
- 須田慎太郎 2011『本土の人間は知らないが、沖縄の人はみんな知っていること』書籍情報社。
- 竹内久顕 2011『平和教育を問い合わせ：次世代への批判的継承』法律文化社。
- 多田治 2004『沖縄イメージの誕生：青い海のカルチュラル・スタディーズ』東洋経済新報社。
- 日本平和学会 2019『平和教育といのち』早稲田大学出版会。
- ひめゆり平和祈念資料館 2004『ひめゆり平和祈念資料館ガイドブック（展示・証言）』ひめゆり平和祈念資料館。
- 平川秀幸 2010『科学は誰のものか：社会の側から問い合わせ』NHK出版。
- フォルジュ、ジャン=F 2000『21世紀の子どもたちにアウシュヴィッツをいかに教えるか？』高橋武智訳、作品社。
- 福島県観光交流課 2019『福島のあの日からいま：震災原発事故の教訓を伝えるために』福島県観光交流課。
- 藤林泰・宮内泰介・友澤悠季編 2014『原点としての水俣病』新泉社。
- 古川安 2018『科学の社会史：ルネサンスから20世紀まで』ちくま学芸文庫。
- 宮城喜久子 1995『ひめゆりの少女：十六歳の戦場』高文研。
- 山口剛史 2018『沖縄から考える平和教育実践の課題』星野英一ら編著『沖縄平和論のアジェンダ』法律文化社。
- 山之内靖 2015『総力戦体制』ちくま学芸文庫。
- 山本義隆 2011『福島の原発事故をめぐって：いくつか学びえたこと』みすず書房。
- 山本義隆 2018『近代日本150年：科学技術総力戦体制の破綻』岩波新書。

<授業の様子>



写真1（ディスカッション）



写真2（ディスカッション）



写真3（霧箱の観察）



写真4（事前説明会）

<フクシマ実地調査 1日目>



写真5（模擬坑道での説明）



写真6（坂本さんの講演）



写真7（吉川さんの講演）



写真8（ジオラマを使った説明）

<2日目>



写真 9 (使用済み核燃料プール)



写真 10 (原子炉格納容器内部)



写真 11 (東京電力職員との質疑応答)



写真 12 (東京電力職員との質疑応答)



写真 13 (富岡復興メガソーラ SAKURA)



写真 14 (夜の森地区実地調査)



写真 15 (東京電力廃炉資料館)



写真 16 (除染土が入ったフレコンバッグ)



写真 17 (倒壊したまま放置された店舗)



写真 18 (仮設住宅をリニューアルした宿舎)



写真 19 (夜のディスカッション)



写真 20 (佐藤さんによるコメント)

<3日目>



写真 21 (請戸地区実地調査)



写真 22 (浪江まち物語つたえ隊による紙芝居)



写真 23 (田中さんの講演)



写真 24 (最終ディスカッション)

<オキナワ実地調査 1日目>



写真 25 (アブチラガマ)



写真 26 (ひめゆり平和祈念資料館)



写真 27 (荒崎海岸でのワークショップ)



写真 28 (夜のディスカッション)

<2日目>



写真 29 (夜のディスカッション)

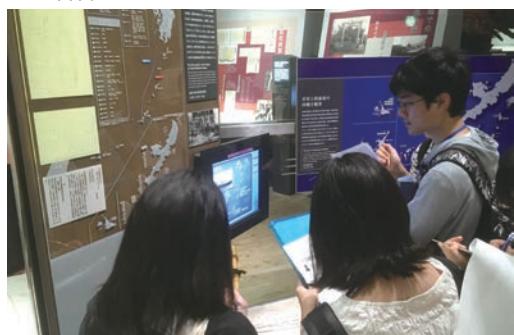


写真 30 (沖縄県平和祈念資料館でワークショップ)



写真 31 (平和の礎でワークショップ)



写真 32 (嘉数高台のトーチカ)



写真 33 (嘉数高台より普天間基地を望む)



写真 34 (上大謝名地区実地調査)



写真 35 (2日目のディスカッション)



写真 36 (2日目のディスカッション)

<3日目>



写真 37 (辺野古での対話)



写真 38 (大浦湾でシーカヤック)



写真 39 (ジュゴンの見える丘)



写真 40 (夜のディスカッション)

<4日目>



写真 41 (海洋博公園実地調査)



写真 42 (海洋博公園実地調査)



写真 43 (山城さんの講話)



写真 44 (民泊家庭との対面式)



写真 45 (ニヤティヤ洞)



写真 46 (ワジーの見学)

<5日目>



写真 47 (全員で記念撮影)



写真 48 (伊江島に別れをつげる)